

とも魅力的で光栄ある働きです。ときにはひどく困難で、疲労し、骨が折れますが、成功すれば、およそ人間に与えられるもつとも光栄ある感情の一つを経験できるのです。私はそのことを請け合います。アーサー・ケストラーの本の表題を借りるならば、『創造のわざ』を行ったことに気づくでしょう。そして神が創造された世界を見て、「よし」と言われた聖書の意味がおぼろげにでも理解できるでしょう。非常によかつたのです。ですから説教者は常にメッセージの準備から始めなくてはなりません。準備の仕方についてはまだ扱っていませんが、後でそれに触れます。準備にはさまざまな方法がありますが、方法はどうであれ、説教者はまずメッセージを準備し、それを真に一つにまとめたものとする事です。これが起点です。しかし、これはまだ前半で、始まりに過ぎないことを心に留めてください。別の一面があるので。それは何でしょうか。準備したメッセージを実際に説教することです。あなたはほとんど完璧だと思うメッセージを持って講壇に立つかも知れませんが、説教し始めたとき、そのメッセージがどうなるかあなたは分らないということを私は示したいのです。もつともそれが真の説教の名に値する場合があります。

5

説教の働き

私たちはここでメッセージを「語る事」または説教の「働き」という、メッセージとは別の、説教する行為そのものを考えたいと思います。これは私たちの扱う主題の第二に大きな面です。

初めに明らかにしておきますが、私はこの問題を概括的に扱うつもりです。まず第一に説教をするとはほんとうは何であるのか、その概要を示し、その後でさらに詳細に考察します。詳細な事柄を議論する前に、概要を捉えておくことは大事です。

この語るといふ事柄は一般に説教すると言われますが、定義するのは非常に困難です。確かにこれは原理原則の問題ではないからです。問題の多くは人々が説教をこうすべきだ、そうすべきでないという指図や規則、規定の問題と見なしていることです。そうではありません。難しさは実際言葉で定義することにあります。説教は人がそれを聞いて分るものです。それで私たちのできることと言えば、それに関してあれこれ言うことしかありません。そうする以上に

この問題に近づくことはできないのです。使徒パウロがコリント人への手紙第一、一三章で愛の定義をするとき、彼が感じたと思われる状態と同じです。記述することは困難です。愛とはこういうものですか、そういうものではありません、と可能な限り多く述べるしかないので。しかし、真正な説教であるならば、そこに幾つか確かな事柄が表れているはずで

まず第一に説教には説教者の全人格が伴っていることです。これは有名なフィリップス・ブルックスの説教の定義でも明らかな点です。すなわち「人格を媒介とする真理」です。私もその通りだと確信します。説教においては一人の人の全能力が必要とされ、その全人格が伴わなければならないと思います。私は身体さえもそうだと言いたいのです。ロンドンのウエストミンスター・チャペルの私の前任者、ジョン・A・ハットン博士がかつて語ったことを思い出します。彼の場合、説教で語る行為とメッセージとの区別がいつもできませんでした。彼の前任者は、イギリスだけでなくアメリカでもよく知られたジョン・ヘンリー・ジョウエット博士でした。ジョウエットは、どちらかと言えば静かで、神経質な人物でした。特に、ウエストミンスター・チャペルの大きな説教壇は彼にはたいへんつらいものでした。その講壇に立つと自分の身体全体がいろいろな角度から会衆に見えるので、まるで裸で競技場に立っているようだと彼はよく言ったものです。それが非常に気になるので、彼はとにかく身体の大部分が隠れるように、説教壇の回りを覆うカーテンを下げられるレールをつけるように頼みました。彼の後にこのジ

ョン・ハットン博士が後継者となりました。彼が着任して三度目くらいの主日礼拝に、たまたま私はその礼拝に出席しました。ほかの人と同様、私は説教壇の回りを覆う布がすべて取り除かれて、以前のように説教者の身体全体が見えることに気づきました。ハットン博士の私たちに對する説明によると、説教者は自分の身体全体で説教すべきだという彼の希望から、その布が取り除かれたというのです。これは彼の場合にはほんとうでした。自分は頭と同じくらい脚も使って説教するので、見るとそれが分るだろうと告げましたが、見てみると確かにその通りでした。しかし、私はそれがいつでも説教を効果的にするとは確信できません。というのも彼はしばしばつま先で立ったり、脚を組んだり、身体を自由に曲げ、あらん限りの格好をして見せたからです。私が示したいのは、彼が説教にはその人全体が伴うと言ったことに意味があることです。彼は一基の像のようにただ立ってくちびるから言葉を発したのではなく、身振りや動作などを含め、彼の身体全体が伴っていました。

私は身振りなどをあまり強調したくないのですが、デモステネスが演説法で第一に必須なこととは何かと問われたときに、彼は「身振り」と答えたことを覚えておられるでしょう。「第二に重要な要素は何か」と問われると、同じく「身振り」と答えました。「それでは第三に重要な点は何か」との問いにも、答えはやはり「身振り」でした。これには疑問の余地はありません。効果的な話し方に身振りはつきものです。説教には全人格が伴わなければならないと私が

強調する理由もそこにあります。

私が強調したい二番目の要素は、会衆とその取り扱いに対して権威と支配意識を持つことです。説教者は決して言い訳をしてはいけません。また、人々の許しを得て語っているかのような印象を決して与えてはいけません。彼は試みにある提案や思想を提唱するものではありません。そのような態度はあってはなりません。説教者はある事柄を「宣言する」ために、その立場に置かれているのです。彼は委任され、権威の下に置かれています。彼は使節ですから、その権威を自覚すべきです。遣わされた使者として会衆の前に立つということをいつも知っていなければなりません。むしろこれは自信の問題ではありません。説教者にとって自信はいつも嘆かわしいものです。使徒パウロ自身そのことを言っています。コリントに行ったときの彼は「弱く、恐れおののいて」いたとあります。私たちも常にそのことに気づくべきです。しかし、パウロの言葉は何も言い訳をするという意味ではありません。自分の行おうとするものの荘厳さ、厳肅さ、そして重大さに気づかされているという意味です。つまり自分には自信はないが、自分は権威の下に置かれ、その権威が与えられているということです。このことは明確にしておくべきです。私はこの要素を最上位に位置づけます。説教者は会衆に支配されるどころか、会衆に対して責任があり、彼らを支配する立場にあるのです。これらの要点の幾つかは後の章でもっと詳しく取り上げます。

「ところで説教者と説教の「働き」に関する一般的な考察で、もう一つの特質は自由の要素です。私はこれを重視したいのです。メッセージをこれまで指摘したように注意深く準備した上で、今度は説教すること、すなわちメッセージを語ることに於いて説教者は自由でなければなりません。説教者は自分の備えたものに頼り過ぎたり、束縛されてはならないということです。これは決定的な点で、説教の語るという行為のまさに本質的事柄です。私は原稿をもって講壇に立つことを問題にしているではありません。原稿がなければ語ることはできないでしょう。私が言いたいのは、説教者はいつでも御霊が自由に働かれるようにしている、そういう意味で自由であるべきだということです。説教を聖霊の影響力とその力による活動と見なすなら、私たちはこの点を強調しなければなりません。なぜならこの備えはメッセージの準備が完了したときに終るものではないからです。また説教に関して注目すべき事柄の一つは、あらかじめ考えたことがなく、準備のときには考えもしなかったことが、実際に話し、語っている間に与えられ、それが最良のものとなることか、しばしばあるということです。

さらに私が重視するもう一つの要素は、語っているとき、説教者はある意味で会衆から何かを引き出さなければならないということです。会衆の中には靈的に高く、聖霊に満たされている人がいますが、その場合、彼らは助けとなります。真の説教にはいつも交流の要素があります。随筆と講義には重大な相違がありますが、随筆とメッセージにも大きな相違があります。

随筆を持って読んでも会衆からは何も得られませんが。ただ自分の書いたものをもってその場に居合わせるだけです。そこに何ら新しいこと、創造的なことは起らず、何の靈的交流もありません。しかし、説教者は——注意深く準備はしますが——この靈的自由の要素があるので会衆から何かを得ることが可能で、実際に受けます。要するに働きかけと応答の相互作用があり、これが随筆と重大な相違をなすところですよ。

およそ説教者の職分に値する者ならだれでもこのことを証言できるでしょう。世俗的な事柄——たとえば政治など——に関することでも、雄弁家と呼ばれる人はこの相互作用を知っています。それで自分が語っている群衆の反応によって集會が作られていくことをよく経験します。それなら説教者の場合には、これらはもつと頻繁に起るべきことです。感謝なことは、説教者がさまざまな理由——十分な準備の時間がなかったり、健康などが最悪の状態——で、その集會が不成功に働いているようなときでも、会衆の反応や熱意が彼を励まし、活気づけてくれることがあります。説教者はこのことを快く受けとめなくてはなりません。そうでないなら、彼は説教者に与えられるもつとも榮譽ある経験の一つを享受しないこととなります。ですからこの自由の要素は非常に重要なのです。

さて以上のことが前章で、メッセージを注意深く完璧に備えても講壇に立つてそれを語り出すまでは何が起きるか分らないと述べたことの意味です。あなたは生じることに当惑し、驚いてしまおうでしょう。しかも新たに語るべき要点が生れ、文章は混乱して不完全になってしまいかも知れません。形式に拘泥する人や、随筆であれば文芸評論家がこれぞとばかりに非難するような事態が生じるのは無理からぬことです。しかし、これこそ説教の本質的な事柄です。なぜなら説教は会衆に何かを行うことを意図しているからです。ですから実際あなたが講壇で語るときはこの要素を保ち、ほかの要素を強調し過ぎなければ、成功できるでしょう。

この自由の要素はほんとうに重要です。説教するということは常に聖靈——その御力とご支配——の下にあるべきです。しかも自分では何が起きるか分らないのです。それで常に自由であってほしいわけです。一方で「注意深く準備しなさい」と言い、他方で「自由でありなさい」と言うのは矛盾しているように聞こえるでしょう。しかし、パウロが次のように語ったとき矛盾がなかったように、何の矛盾もありません。「恐れおののいて自分の救いを達成してください。神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです」(ピリピ二・一二、一三)。あなたの準備を助けてくださった聖靈は、語っているときにも、まったく新しい方法であなたを助けてくださり、メッセージの準備のときには分らなかったことをあなたに理解させてくださる、このことをあなたは発見するでしょう。

続く要素は厳肅さです。説教者はまじめな人間でなければなりません。説教について何か軽しく、浅薄で、取るに足りないものだという印象を決して与えてはいけません。このことには少しだけ触れます。後で詳細に取り扱うつもりだからです。しかし、およそ人間が共に考察する事柄のうちで、もつとも重大な問題を取り扱っているという印象を説教者は当然与えなければなりません。このことだけは述べておきます。

さて説教において何が起きているのでしょうか。説教者は神から与えられたことを人々に語っています。神について、そして人々の魂の状態や状況について語っています。彼は人々が生れながら神の怒りの下にあつて——「ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けべき子ら」——であること、彼らが今生きているのちは神に敵対していて、神の裁きの下にあることを告げています。さらに彼らの前途には恐るべき永遠の出来事があることを警告しています。ともかく、だれよりも説教者はこの世のいのちのはかなさに気づいていなければなりません。世の人々は仕事やさまざまの出来事、またすべての空しい快樂に没頭し、静まつてこの世のはかなさを考えることは決してありません。それで説教者はいつでも、講壇に姿を現す瞬間にも、今重大なことが行われているとの印象を作り、与えるようにすべきです。リチャード・バクスターの有名な詩を覚えておられるでしょう。

私はもう二度と語るつもりで説教した。
死んで行く者が死につつある人たちに語るように。

説教することをこれ以上上手に表現できるとは思いません。前世紀、スコットランドの聖徒と呼ばれたロバート・マレー・マックスウェンについて語られたことを覚えているでしょう。彼が講壇に現れると、一言も彼の口から言葉が発せられないうちから人々は静かに泣いたそうです。なぜでしょうか。この厳肅さという要素のゆえでした。この人を見ただけで、神の御前から現れて、神からのメッセージを語ろうとしているという印象を人々に与えました。それで彼が口を開く前から人々に影響を与えたのです。私たちは聴衆のためにはいのちがけで、どんな犠牲を払っても、というこの要素をなおざりにしています。

次にこれまで述べてきたことの誤解を修正するため、というよりそれを擁護する「快活さ」の要素に触れます。この要素は、まじめであることはしかつめらしさや、憂いに沈んだり、病的であることを意味しないということを書き添えてくれます。この違いは非常に大切です。説教者は快活でなければなりません。快活であると同時にまじめであることは可能です。

言い方を替えれば、説教者は決して精彩さを欠き、退屈させてはならないことです。いわゆる「陰うつ」であつてはならないのです。この点を強調するのは私自身そう言われて、大いに

悩んだからです。私は改革派の流れを汲み、過去四十年間ほど英国においてこうした点を強調し、それを復興させることに多少かかわってきたからかも知れません。確かに若い改革派の人の多くはたいへん善良で、多くの本を読み、博学です。しかし、彼らがつまらなく、退屈な説教者だとしばしば教会員から聞かされると私は不安になります。その上同じ改革派の立場の人からもこのことを告げられることがあるのです。これは私にとって非常に深刻な問題です。つまらなく退屈を感じさせる説教者は、根本的にどこか間違っています。一体このような主題を扱っていないが、人にどうしてつまらないと感じさせることがあるのでしょうか。「退屈な説教者」は言葉からして矛盾しています。もし退屈させるなら、彼は説教者ではありません。彼は講壇に立って語るかも知れませんが、説教者ではありません。聖書の壮大な主題とメッセージがあつて退屈を与えるはずはありません。それは世界中でもっとも興味をそそられ、心震わされ、夢中にさせられる主題だからです。それをつまらぬような態度で語ることを考えると、一体その人たちは自分たちが信じていると主張し提唱する教理をほんとうに理解しているのかどうか真剣に疑いたくなります。こうしたことで私たちはしばしば自分の本性を暴露します。

続いて関心の度合いを示す熱心さの要素に移ります。むしろこれらの要素は深くかかわっています。熱心さは、説教者は自分の語る事柄に心奪われているとの印象をいつも伝えなければならぬからです。自分が夢中になつていないのにどうしてほかの人を夢中にさせることができるのでしょうか。それでこの要素は絶対不可欠です。説教者は語っている事柄に捉えられ、心奪われている事実を通して人々に感動を与えなくてはなりません。伝えたい題材が山ほどあり、どうにかしてこれを分ちたいと熱望します。自分自身大いに感銘し、感激しているので、ほかの人々にもこれを分ち合いたいと望むのです。さらに人々への気遣いから彼らに説教します。人々のことに心砕き、何とか彼らの助けになりたい、そして彼らに神の真理を教えたいとしきりに願います。そこで彼は精魂を傾け、情熱を燃やし、人々に対するこのはっきりした気遣いをもって語るのです。換言すれば、みことばの真理から離れて語る説教者は、たとえどんなに立派で、真実ですばらしい事柄をあれこれ語っても、それだけなら説教者とは言えません。

最近、私は今批判したような事柄の顕著な例に遭遇しました。私はイギリスのある村に滞在中、病氣静養をしていたときのことです。道路を渡ってすぐの所にある教会へ出かけましたが、その晩、説教者はエレミヤ書から説教しました。彼はその預言書の連続説教をしていると私たちに告げました。聖書箇所はエレミヤがもはや神のことばを語るのに耐えられなくなったが、みことばが彼の骨の中で火のようになったという、あのすばらしいところから語り始めました。そこが彼の取り上げたテキストでした。果してどうだったでしょうか。私は何か異様なものを目の当りにしたような気持ちでその礼拝から帰りました。というのは、その礼拝では一つの大切なことがまったく欠けていたのです。それは「火」です。この説教者はまるで氷山に

座っているかのようにして火について語りました。事実、彼は超然と冷やかな態度で火という主題を扱ったのです。自分で火について語りながら、実際そこには火がないのです。死んでいるので火がなかったと言うべきかも知れません。構成や準備の点からすると良いメッセージで、このことかなり配慮したことがうかがわれました。しかも彼は一言一句書き出していました。というのも彼はそれを読んでいたからです。欠けていたのは火でした。熱意も熱心さも会衆の私たちに対するはつきりした心遣いも見られなかったのです。彼の態度はただ超然として、学問的、形式的なものでした。

これに関連して次の出来事を述べます。私は何年前、スコットランドのある有名なジャーナリストが、彼の出席した集会に関して書いた記事を読んだことがあります。彼は私にとって二度と忘れることのできない表現を用いました。その言葉はしばしば私を叱責し、批判するものとなりました。彼は同じ主題に関する二人の説教者の話を聞いたのです。彼によると二人とも非常に有能で、博学であったそうです。しかし、次に彼が述べたことは実に見事です。「二人の相違と言えば、前者は弁護士として語り、後者は証人として語ったことです。」この言葉はここで扱っている要素を実に具体的に表現しています。説教者は決して単なる弁護士ではありません。弁護士や法廷代理人の責務と働きは、法廷でだれかを代表することです。彼はその人物に関心はなく、知りもしないでしょう。個人的に興味ももっていませんが、その人の事件

に関して弁護の依頼を受けています。彼には被告の申立書が用意されており、それにはこの事件のすべての事実、詳述、法律上の要点、顕著な事柄が記載されています。それを手渡されて彼が行うことと言えば、その申立書にしたがって話すことだけです。個人的なかかわりも関心もありません。彼は自分と直接かかわりのないところで問題を扱う、離れた立場にいるのです。

説教者の場合、決してそうであってはなりません。再度言いますが、ここが説教者と講義者との違いです。説教者は初めからかかわりがあります。ですからこの熱意の要素が必要なのです。彼はある事件をただ「処理する」のではなく、それだけで終わろうとするのは多くの説教者の最大の誘惑です。生来論争的な人は特にそうです。しかし、私たちには比類のない事件があります。すでに学んだように組織神学があり、みことばの真理についての知識もあります。私たちにはこの事件を論じ、論理的に語って論証し、証明してすべての反対や反論に反駁する何とすばらしい機会が与えられていることでしょう。もし説教者が事件を示すだけの弁護士に過ぎないという印象を与えるなら、完全に失敗です。説教者は証人です。「あなたがたは……わたしの証人となります」（使徒一・八）。これは私たちの主ご自身が語られたことばです。つまり説教者は常に証人でなければならないのです。説教者にとって個人的にかかわっているとの印象を与えられないほど、致命的なことはありません。

以上のことから必然的に「温かさ」の要素がはいってきます。今はやりの言葉で言うなら、

説教者は「臨床講義的」であってはいけないことです。しかし、説教者はしばしばそうなっています。彼のすることはすべて正しく、ほとんど完璧ですが、臨床講義的でないのちがいないのです。冷やかで動きがありません。それは彼自身感動していないからです。しかし、説教者はそうではないはずです。もし自分が語っていることをほんとうに信じているなら、それに感動しているはずで、そうでないことなどありません。そしてその感動が温かさに連なるのです。使徒パウロ自身「涙をもって」説教したと告げています。使徒の働き二〇章で彼はエペソの長老たちにそのことを思い起させています。またピリピ人への手紙三章で偽りの働き人に言及した際、彼は「涙をもって」語っています。

ところでパウロは非凡な知性の持ち主で、歴史上もっとも偉大な指導者の一人でした。しかし彼が語り説教するとき、しばしば涙をもって行ったのでした。彼はよく感極まって涙しました。すぐれた知性はあるが、感情を持ち合わせていない人なら、どこからあのような観念が生じるのでしょうか。ほんとうにこっけいで愚かしいことではないでしょうか。私はこうしたことに感動を受けない人はほんとうに理解してはいないと言いたいのです。人間は空っぽの中に知性がいっているのではなく、欠けたところのない存在です。頭脳も心も持っています。もし、その頭でほんとうに理解するなら、その心は感動を覚えるでしょう。使徒パウロがローマ人への手紙六章一七節でこのことをどう記しているか覚えておられるでしょう。「神に感謝す

べきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し」と述べています。もしその人の心が伴っていないなら、私たちが取り扱うみことばの真理そのものの性質からして、頭でも理解しているかどうか、私は問い正してみたいのです。むしろこのことはどの時代の偉大な説教者にもすべてあてはまります。ホイットフィールドの場合、彼はほとんど必ずと言ってよいほど、説教しているとき、涙が彼の頬を流れ落ちていたそうです。私たちはこの点においてとがめられ、非難されるべきだと感じます。私自身その責めを受ける必要のあることを率直に告白します。過去において常に偉大な説教者を特徴づけていた説教におけるあの情熱はどこにあるのでしょうか。なぜ過去の偉大な説教者がしばしばそうであったのに、現代の説教者は感動を受けることなく、夢中になることがないのでしょうか。みことばの真理は変わっていません。私たちは信じているでしょうが、それに捉えられ、それによって謙遜にさせられ、「すばらしい愛と賛美に我を忘れる」まで高められているのでしょうか。このような理由から説教者と聴衆には触れ合いがあります。遊離するどころかラポート（親密な関係）があつて、それは彼の声や仕種そして行為全体に現れます。彼に関するすべてから説教者と会衆の間にこの親密な触れ合いのあることが示されるのです。

続く要素は「緊迫さ」です。ある意味でこの点にはすでに触れましたが、本来これを切り離して強調する価値はありません。常に説教者はパウロがテモテに語ったように、「時が良くても

悪くもしつかり」やらなければなりません。その理由も同じで全体を扱うという状況のためです。この緊迫さが説教を驚くべき働き、またそれほど責任ある庄倒されるような事柄とするのです。使徒パウロがその務めを思い見て、「このような務めにふさわしい者は、いったいどれでしょう」と問うたのは驚くに当たりません。自分の頭には十分な知識があるからふさわしいと考える人はもう一度学び直すべきでしょう。「このような務めにふさわしい者は、いったいどれでしょう。」あなたは講壇で何をするのでしょうか。ただ知識を分け与えるのではなく、魂を扱うのであり、永遠への途上にある巡礼者を扱い、この世のいのちと死だけでなく、永遠の定めをも扱っているのです。これほど緊迫した事柄はほかにありません。私は一九四〇年頃、スコットランド周辺のリバイバルに大いに用いられたウィリアム・チャマーズ・バーンズが、私がすでに言及したロバート・マレー・マックスウェーンの教会である午後語った言葉を思い出します。彼はある日、同労者の肩に手を置き、「兄弟、私たちは急がなければならぬ」と言いました。もし私たちがこの緊迫感の何たるかを知らないなら、真の説教が何かを知らないのです。講義はいつでもできます。今行ってもほかのときに行ってもそれほど違いはないでしょう。主題が何であつてもそうでしょう。しかし、福音のメッセージは延期できるものではありません。なぜならあなたもほかの人々もこの一週間この一日生きているかどうか分らないからです。「私たちは人生の最中に消え去るのです。」もし説教者がこの緊迫感、すなわち彼が

神と人との間、過ぎゆく時間と永遠の間立つていることを示さないなら、彼は講壇で語る必要はないでしょう。こうした緊急の問題を前に落ち着き払い、冷淡で科学的で超然とした態度がはいり込む余地はありません。哲学者ならそれで良いでしょうが、自分がかかわり、しかも全人格を取り扱うという立場にあつて、そのような態度は説教者には考えられません。

さてまったく同じ理由から説教には説得力がなければなりません。「私たちは、キリストに代わつて、あなたがたに願います。神の和解を受け入れなさい。」確かにこの働きの目的全体は人々を説得することにあります。説教者は「ご随意に」といった態度で話すではありません。彼は人々にメッセージの真理を信じさせようと切望します。彼らがそれを理解し、そして何とかして彼らに影響を与えたいと努力します。ある聖書箇所を論文を語ったり、自己の知識を披瀝するわけではありません。説教者は生きた魂を扱うのであり、人々に感動を与え、共に彼らを携えてみことばの真理へ導こうとするのです。これが彼の目的のすべてです。もしこの要素を欠くなら、どんなものもそれは説教ではありません。すべてこうした要素は講義と説教、また随筆とメッセージの違いを明らかにしてくれます。

特別な言葉で、ある意味でこれもすでに触れましたが、あわれみの要素について一言述べなければなりません。私の奉仕において何にもまして責められる点があるとすれば、おそらくこの要素に欠けていることでしょう。当然これは人々に対する愛から生じます。ロンドンにある

せ、涙させるあの燃えるようなみことばを記したのです。それは神がキリストにおいて私たちのためになしてくださったこと、そのための苦しみ、私たちに對する神の愛の偉大さを思い巡らすことから来るのです。「神は、(実に)……世を愛された」からです。

このあわれみの要素は、時代を超えてもつとも偉大な説教者の一人であるホイットフィールドの説教の特徴でもありました。「メソポタミヤ」という語をホイットフィールドが発音したように発音できたらしいのに、と言ったのは十八世紀のすぐれた俳優、デビッド・ギャリックでした。また彼はホイットフィールドと同じように、「オー！」と発音できるなら百ギニーを上げてもよいと言いました。純真さを失った現代人はこのことを笑うかも知れませんが、私たちが本物の説教者になるのはこの心打つ特質の何かを知り始めたときです。むろん効果を演出しようと努めるなら、それは役者であり、いかかわしい詐欺師です。しかし、事実にの心に「神の愛が注がれている」なら、ホイットフィールドの場合のようにあわれみの情が生じるのは必然的なことです。

私にとってこのあわれみの要素は非常に重要です。それは今世紀に著しく欠けているもので、たぶん改革派の人々の間では特にそうでしょう。私たちはバランスを失い、知識過剰の傾向にあり、感覚とか感情を軽蔑しかねません。非常に学問があり、真理をよく理解しているため感情を軽蔑する傾向があります。そして一般大衆のことを感情的、感傷的で悟りがないなど

英国国教会の説教者で、十八世紀の末から十九世紀の初め頃に活躍していたリチャード・セシルが語った言葉は私たちのだれをも考えさせるに違いありません。「説教することを愛するのと説教を聴く人々を愛するのは別問題である。」ある説教者に問題なのは説教することを愛するが、実際説教を聴いている人々を愛しているかどうかを注意し、確かめないことです。人々に對するこの同情の要素を欠くなら、真の説教にはまことに重要なあわれみをも欠くでしょう。私たちの主は大勢の群衆を目の当りにされ、「彼らが羊飼いのいない羊のようであるのをご覧になり、深くあわれまれた」のです。ですからこのことの意味を知らないなら、講壇に立つべきではありません。というのもこれは必ず自分の説教に現れるからです。純粹に知的、議論的にならず、この要素が含まれていなければなりません。人々に對するあなたの愛がこのあわれみを生み出すだけでなく、語る事柄そのものがその働きをなすからです。一体神がキリストにおいて私たちになしてくださったこと以上に感動的なことがあるでしょうか。このみわざをよく考え理解しようとするれば、私たちは当然深く感動させられます。偉大な使徒自身に起きた事柄に注目してほしいのです。彼はまず、私たちの罪深さ、失われた状態、そしてキリストに對する全幅の信頼を私たちに悟らせようと、議論をもって始めています。しかし、彼が主ご自身について述べるとき、彼は議論を忘れてしまい、あのすぐれた弁舌がはばたき、ほとばしり出ているのです。彼は自己のもつとも深いところで感動しているので、私たちをも感動さ

と感じるのです。

しかし、これは神に造られた人間の本質的部分である感情を見くびろうとする危険、傾向ではないでしょうか。私たちは何に夢中になり、深く感動すべきか分らなくなっています。マシュー・アーノルドの宗教に関する記述を覚えておられるでしょう。「宗教は感情を帯びた道徳である」と彼は言いました。いかにも彼らしい言葉ですが、何という誤り、何とひどい言葉でしょう。「感情を（帯びた）道徳」ただ（帯びた）だけです。それ以上は無作法で失礼になるということでしょう。この「偏狭な紳士」は決して感情を表に出しませんでした。ところでマシュー・アーノルドがラグビーにある有名なパブリックスクールの校長、トーマス・アーノルドの息子であることを忘れないください。彼は真の紳士は決して感情を出さず、常に抑えておくべきだと教えました。この見解が教会とクリスチャン生活に浸透したのでしょう。感情は下品なもののように見なされています。しかし再度言いますが、もし説教者として私たちに委ねられたこの栄光ある真理を冥想してもなお感動しないなら、自分の信仰に問題があるのです。パウロの場合、彼のすぐれた魂の深層部にまで感動を受けずにこれらの事柄を見つめることはできませんでした。一例を挙げますが、それはローマ人への手紙九、一〇、一一章です。ここでは彼がユダヤ人固有の問題をどう説いているか分ると思います。彼の語る信仰義認などの教理について論じているときに、どこにユダヤ人や彼らの立場がはいり込む余地があるのでし

よう。しかし、彼はこのユダヤ人の主題を取り上げ、それを論理的に考察してあの偉大な結論に到達したのです。しかも彼は次のように展開させています。

ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょうか。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょうか。なぜなら、だれが主のみこころを知ったのですか。また、だれが主のご計画にあずかったのですか。また、だれが、まず主に与えて報いを受けるのですか。というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。

これはまったく崇高な感情です。私の言う感情とは感情主義のことではないことに注意してほしいのです。私はそれを断固退けます。人の表面的、皮相的な感情に働きかけようとするほど忌むべきことではありません。それを非難する以上の興味は私にはありません。しかし私の主張は、自ら信じてと公言しているこの真理をほんとうに理解しているなら、そこから感動を受けるはずだということです。そうでないなら偉大な使徒をも包み込むあの感情の交わりの内にその人は属していないこととなります。しかし感情を嫌うのは流行となっています。

二、三年前、ロンドンで大きな伝道集会があったときのことで。ある日、宗教界の指導者

が私のところへ来て、「あなたはその集会へ行きましたか」と尋ねました。私は「いいえ。まだです」と答えると、彼は「ほんとうに驚くべきことです。驚異です。何百人もの人々が決心して前に出てくるのです。しかも感情を表さしないで。ほんとうに驚きです」と続けました。彼は「感情を表さないで」という言葉を何度も繰り返しました。彼にとって驚嘆すべきことは、訴えに応じて前に進み出たすべての人々が感情を表面に出さなかったことでした。これはほんとうに栄光あることでした。感情が表されなかったことはすばらしく、驚嘆すべきことだったのです。

一体このような態度を何と言ったらよいのでしょうか。一、三質問をしてみたいと思います。一人は感情をもたずに自分が呪われた罪人であることを知ることができるでしょうか。感情なしで地獄を垣間見ることができでしょうか。律法の雷鳴のような轟きを聞いて、何も感じない人がいるでしょうか。あるいは逆に、人はキリスト・イエスにある神の愛をほんとうに深く思い巡らしても、何の感動もないということがありうるでしょうか。すべてそのような状況はまったく馬鹿げています。行き過ぎや感情主義に対する反動として、今日多くの人も、結局、実質的にみことはの真理を否定する立場に自らを置いているのです。イエス・キリストの福音は全人格をとらえるものです。もし福音がそれをしないなら、それは福音ではありません。福音はそのためにあり、実際その働きをします。福音は新生に導くものなので全人格

にかかわるのです。ですからあわれみや感情、すなわち感動を受けるといふこの要素は説教において常に顕著であるべきです。

最後に「力」の要素に触れます。今これを詳しく論じません。これだけで一章を費やす価値があるので、後の章で触れることにします。ただ、力がなければ説教ではありません。究極のところ説教は神のみわざです。人がただ言葉を発することではありません。神が人を用い、人は神に用いられるのです。しかも彼は聖霊の影響力の下にいます。パウロがコリント人への手紙第一、二章で述べているように、「宣教とは、……御霊と御力の現われ」です。またテサロニケ人への手紙第一、一章五節で、「私たちの福音があなたがたに伝えられたのは、ことばだけによったのではなく、力と聖霊と強い確信とによったからです」と述べている通りです。これが真の説教の本質的要素です。

以上を要約すれば、真の説教は——メッセージとそれを語る働き——のこの両方の要素が正しく調和し、結び合わされることで成り立ちます。メッセージに加えて、この「語る働き」があり、これが真の説教となるのです。両方とも強調されなければなりません。この二つの相違については多少触れましたが、もう少し付け加えなければなりません。もしあなたがメッセージとそれを語る働きとの相違を知らなくても、説教者であればすぐにそれに気づくようになります。この違いにどのように気づくかというと、私の場合もよくありますが、次のようにして

生じます。ある日曜日に自分の教会で説教しますが、語っていてなぜか自然で、よどみなく、かなり力も加わります。自らも感動し、いわゆる「すばらしい礼拝」となり、会衆も同じようにそう感じて、実にうまくいったわけです。ところが翌週の日曜日や平日の夜などにほかの所で説教することになっていきます。それで「前の日曜日に語ったメッセージをもう一度語ろう。あれでとても良い礼拝になった」と自分に言い聞かせます。さて、そこへ出かけて行き講壇に立って同じテキストから語り始めますが、突然、自分は何も持ち合わせていないのに気づき、自分の手の中ですべてが崩れ去るように思われるのです。これをどう説明できるでしょうか。一つは次のように説明できるでしょう。先の日曜日自分の講壇で語ったときには聖霊があなたと会衆に臨まれたのです。(これはよくあります。以前に説明したようにおもに会衆に臨み、説教者は彼らからそれを受けます。)それであなたのメッセージが引き上げられ、特別な油注ぎと権威を与えられ、その結果あのような例外的な礼拝になったのです。しかし今、目の前の会衆は異なり、状況も違い、自分自身も違和感を感じているかも知れません。今はもう自分のメッセージに頼るしかありません。しかし、そのメッセージも大したものではないと気づくのです。以上の出来事はメッセージとそれを語る働きとの相違をよく例証していますが、これはほんとうに神秘的なことです。これについては後に再度言及します。今はその二つが違うことと真の説教にはこの二つが結びついていることを強調しておきます。どちらか一方に頼ってはなら

ないのです。メッセージにだけ頼るのも、語る働きにだけ頼るのもよくありません。真の説教には両方とも必須です。

以上に関して一つのエピソードを紹介します。ウェールズに私のよく知る老説教者がいました。この人はたいへん有能で、すぐれた神学者でしたが、残念ながら皮肉を言う傾向がありました。しかし、とても鋭い批評家でした。たまたま彼はある宗教会議に出席しました。そこで二人の人が閉会のために説教をしたのです。二人とも神学教授でした。最初の人が語り終えると、この老説教者の批評家は隣の人に向かって「熱のない光」と言いました。今度はもう一人の教授が説教しました。彼は先の人より年上で、幾分感情的な人でしたが、彼の説教が終ると、この老批評家は隣の人に「光のない熱」と言ったのです。しかし、どちらの場合も彼の言った通りでした。大切な点は両者とも不完全だったことです。光と熱が必要なのです。すなわちメッセージには語る働きが伴っていないければなりません。熱のない光はだれにも影響を及ぼさず、また光のない熱も永続的な効果を持ちません。一時的に影響を与えても自分の会衆を助け、建て上げ、真に彼らを取り扱うことはありません。

では説教とは何でしょう。それは燃え立つ理論、雄弁な理性です。これは矛盾しているのでしょうか。むしろそうではありません。使徒パウロやほかの人々に見られるように、みことばの真理に対して理性は大いに雄弁になります。それは燃え立つ神学です。私は燃えない神学は欠

陥のある神学だと主張します。少なくともそのような人の神学理解には欠陥があります。説教は燃えている人を通してもたらされる神学です。みことばの真理を真に理解し、経験するならそこに通じます。こうした事柄を冷淡に語るような人は講壇に立つ権利はなく、決して許されるべきではありません。

ところで説教の第一の目的は何でしょうか。それは人々に神とその臨在を感じさせることです。すでに述べたように、私はここ一年ほど病気を患っていましたので、自分では説教せず、ほかの人の説教を聞く機会と特権が与えられました。肉体的弱さの中で説教を聴き、この臨在こそ私が追い求め、切に願うことでした。もし私に神を感じさせ、私の魂のために何かを与え、しかも何かとても偉大で栄光に富む事柄を扱っていると感じさせてくれるなら、また神の尊厳と栄光および救い主なるキリストの愛と福音の重要性をおぼろげにでも垣間見させてくれるなら、たとえまずいメッセージであれ何であれ、私はそれを赦します。そして彼に對し有難く思ひ、心底より感謝の意を表明します。説教は人が携わる事柄でもっとも驚くべき感動的な働きです。というのもこの働きは現在も私たちすべてに提供されていて、永遠の未来で栄光に富む無限の可能性があるからです。

さて二つの文を引用して終ります。百年以上前、アメリカにジェームス・ヘンリー・ソーンウェルというすぐれた説教者がいました。おそらく彼は南部長老派教会の生んだもつとも偉大

な神学者です。しかもすぐれた説教者で、非常な雄弁家でした。彼のことをサムエル・デービスに次いでアメリカ大陸が生んだもつとも雄弁な説教者だと言う人たちもいます。ともあれ、以下はソーンウェルの伝記作家が彼に会って、直接その説教を見聞きしたときの印象を伝えようとしたものです。説教の働きは全人格が伴っているので、聞くことと同じように見ることに關しても、これは私の説教の定義を確証し例証している点に注意してほしいのです。彼は次のように述べています。

あの燃えるような目、震えつつ変化する声の響き、そして表情豊かな動作。何かを予表するかのような独特な身振り、みわざをなし終えた創造者の完全さを内に形造って震える身体。どんな象徴をもつてそれを伝えられましょう。いかずちの閃光、空に織りなす羊毛の雲、大海原の波頭を。それは巧みな画家も及ばず、筆舌にも尽し難いものです。

以上がソーンウェルの説教に関する彼の印象でした。

続いてソーンウェル自身説教について、また説教者としての自分をどう言っているか見るとにしましょう。

説教者であるとはどういうことか、また説教はどのようになされるべきかを理解することは非常に重要です。効果的なメッセージは学びと鍛錬と祈り、そして特に聖霊の油注ぎの所産です。それは語ろうとするすべての異なった素材のすぐれた点を結合させてくれます。また単に信仰からくる熱意だけでなく、拒むことのできない天来の愛の影響力をもって語られるべきです。それは心から、すなわちキリストと魂とに対する愛に満たされた心から生じるのが分るようであればなりません。確かに世界ではそれほど宣教はなされておらず、宣教を専門とする多くの教職者の資質を考えると、神のご目的が世においていまだ消滅していないのは神の恵みと力の不思議です。これ pensando と私は自分自身が行ってきたことに対して嫌悪を感じます。これまでメッセージらしいメッセージを作ったことはなく、まして説教をしてきたと言える者でもありません。それに私はこの働きに絶望を感じ始めています。どうか神があなたがたにさらに多くの知識と恵みを与えてくださり、みむねに対するひたむきさを与えてくださいますように。

以上のことに付け加えることは何もありません。説教するとはどういうことかを多少なりとも知る者ならだれでも、自分は決して説教してきたのではないと感じざるをえないでしょう。しかし、いつの日か神の恵みによって真の説教ができることを望みつつ、努力し続けるのです。

6

説教者

私たちの扱う説教という主題へのアプローチについて、私は今一度あなたに思い返していただきたいと思えます。私たちは教会の礼拝にあって、講壇に立ち人々に語る人について考察しています。これまで説教が極めて重要なものであること、すなわち説教が教会の主要な働きであり、責務であることを示しました。さらに説教の二つの面——メッセージとそれを実際に語る働き——について熟考してきました。私とすれば、少なくともこの二つの面の大切さを明らかにできたかと確信します。つまりそのどちらも欠くことができず、両方とも不可欠で真の説教にはこの二つの要素が正しく調和していることです。

さて同じアプローチを続けます。一般的に説教というものを考察するとき、論理的に言っただけの質問は、だれがこれをするのかということですが、だれが説教をするのか。これまで私たちが定義したメッセージを指摘してきた方法で語るのに、聖書の言葉で言うなら、「このよきな務めにふさわしい者は、いったいだれでしょう」ということです。特に教会はまったく必

要ではないと言われ、「宗教なきキリスト教」について語られている今日、非常に重要な問いです。教会の存在価値を認める人々の間でも、問われる必要があります。「だがこの説教をすべきか」と。

第一原則は、すべてのクリスチャンが説教するように意図されてはいない、すなわちクリスチャンの男性ならだれでも説教してよいのではないということです。まして女性の場合はなおさらです。そこで私たちは、いわゆる「信徒説教」について考察しなければなりません。この信徒説教は百年以上にもわたりごく普通に行われてきました。それまでは比較的まれでしたがかなり一般化してしまいました。時間がなくてここではできませんが、その歴史を研究することも面白いでしょう。しかし興味深いことに、その変化にはまたもや神学的理由が見られることです。前世紀に神学が改革派カルヴァン主義から本質的にはアルミニウス主義へと変化しました。それが信徒説教の増大を招いたのです。その原因と結果を説明すれば結局、アルミニウス主義神学の特徴です。今日、多くの教派が概して寛容的であるのもその理由からです。このようなわけで説教はクリスチャンの男性ならだれでもよいとし、その後クリスチャンの女性でもだれでも自由だとする考えが流布するようになったのも、驚くに当りません。

しかし、これは説教に対する非神学的見解です。もちろん、信徒説教を必要とする例外的状況はあります。しかし、そうなら果してそれが「信徒説教」と言えるかどうか問い直してみたいのです。例外的状況と言うのは、よくあるように教会の立場や状態——財力が乏しいなど——によって、教会が一人の人をフルタイムの働き、特に説教の働きのためにサポートできない場合です。この点に関する定義は重要です。おもにメソジストとブレザレンの教えからくる現代の信徒説教の見解は、信徒説教が通常の働きであって例外的ではなく、説教者は自分の生計のために職業や仕事を持ち、いわゆるその合間に説教する人だということです。

しかし、私の考える例外的な立場とは、主の働きに召されていると感じ、その働きに全時間を用いたいと願っても、私の述べるような事情でそれができない場合です。彼は教会が経済面やそのほかの点で充分強くなって、全時間をこの働きに用いるため自分をサポートしてくれる日待ち望んでいるのです。その場合、厳密な意味で私は彼を信徒説教者とは呼びません。説教するには、彼は当面ほかの仕事をして生計を立てなければなりません。ところで私が調べてみたいのは、クリスチャンならだれでも説教はできるし、また実際すべきだという観念です。このことを定期的に教えてきた幾つかの教派があります。「新しい回心者に何かすることを与えなさい。説教と証しのために送り出さなさい」などといったスローガンがありました。人が、人々を無理やり説教に駆り出そうとする傾向は現在もあります。これはかなりチャールズ・G・フィニーやD・L・ムーディの影響によるもので、彼らは新しい回心者に何かをさせるという考えに非常に熱心でした。

では私たちはどんな根拠に基づいて、説教に対するこのような態度に批判的なのでしょうか。それはペテロの手紙第一、三章一五節でペテロが、「あなたがたのうちにある希望について……弁明できる用意をしていなさい」と述べているように、すべてのクリスチャンは弁明の備えをすべきだということ、すべてのクリスチャンは福音を説教すべきだということとの相違を理解していないためだと思うのです。相違点はそこにあります。すべてのクリスチャンは自分がクリスチャンであることの弁明ができなければなりません。しかし、直ちにそれがすべてのクリスチャンは説教すべきだということにはならないのです。

この相違は使徒の働き八章四、五節でたいへん興味深く明らかにされています。一節でエルサレムの教会に対する激しい迫害が起り、使徒たち以外の者はみな散らされたとあります。続く四、五節で次のように記されています。「それゆえ散らされた人たちは、みことばを宣べ伝えながら、巡り歩いた。そしてピリポはサマリヤの町に下って行き、人々にキリストを宣べ伝えた。」以上は欽定訳聖書の訳で、両方とも「宣べ伝えた」(preached)という語が用いられています。しかし、原文ではこの二つの節で同じ単語は使われていません。このことは重大な相違です。あちこちに散らされた「人々」は、ある人の訳にあったように、みことばを「言い広めた」のです。人々との会話の中でそのことが語られたのです。一方ピリポは違ったことを行いました。すなわち、彼は福音を「布告」したのです。これが秘密に言って、私の言う説教す

ることの意味です。この相違が聖書のその所で実際に記されてあるのは偶然ではありません。

すべてのクリスチャンは四節にあるように、言い広めることができなければなりません。しかし、五節に記されていることを行うためには召された人たちがいるのです。新約聖書には非常に明確にこの相違が記されています。ある人たちが選ばれたれ、みことばのご用のために、いわば、公に教会のために召されているのです。その働きは長老たちのうちの幾人か——教える賜物が与えられた長老、牧師、教師たち——に限られています。新約聖書における説教は使徒、預言者、伝道者のような人々に限定されていたことは明白です。

なぜ私はこれが重要だと言うのでしょうか。いわゆる「信徒説教」に対する究極的な批判は何でしょうか。答えましょう。そこには「召命」という觀念がまったく失われているからです。信徒説教という考えを支持できない理由が幾つかあります。これまで私が示した説教者とその働きという観点からも、説教は人が召されてする働きだというだけでなく、例外的な状況を除き、自分の全時間を占めるべき事柄だというのが私のおもな論点です。説教はいわば片手間にすることでありません。それは説教に対する誤ったアプローチであり態度です。

そこでまずこの召しの問題を考えてみましょう。説教者とは何者でしょうか。明らかに説教者もほかのクリスチャンと同じく一人のクリスチャンです。これは根本的なことで、絶対不可欠なことです。しかしそれ以上のことがあります。さらに何か別のことがあるのです。そこに

で何らかの動揺があり、その人の心は説教という事柄に向けられます。これまであまりそのことを深く考えたことはなく、その可能性も冷静に考えたことがなかったかも知れません。しかしいろいろ考えあぐんで、この問題を取り上げようと決心するのです。これは自分に何かが起きるというのではなく、神が彼を取り扱ってください、ご自身の御霊によってその人に働きかけてくださいなのです。ですから自分で何かをするというのではなく、むしろ気づくようになりませう。この問題が自分に押し迫り、明示され、絶えず強要されるようになりませう。

こうして自分の霊の領域で起きた事柄が、ほかの人々が自分に語りかけたり問いかけることによって影響され、確信が強められるのです。これがしばしば人が説教者に召されるときの特徴です。多くの人の伝記の中で、説教することなど考えたこともない一人の若者が、長老とか霊的にすぐれた教会員から、「あなたはこの福音の説教者になるよう召されているとは考えませんか」と問われ、尋ねた人はその理由を彼に話します。その人は彼をずっとよく見てきて、そのような導きを感じたのです。最初の働きかけは、たぶんこのような人を通してですが、私の経験では、この二つの事柄が同時に進行しました。

以上のことが発展し、それが他者に対する関心へ導かれます。私は一つの職業ないし「召命」に就くことと、教職者になるというあまり一般的でない考えを対比しています。というのも、真の召命にはいつでも他者に対する関心や興味、そして彼らの失われた立場や状態に気づき、

この召命という問題が生じるのです。説教者は自分で説教をしようと決心したクリスチャンではありません。彼は自分でそのような決定はできません。説教することを自分の召命にしようと思われ、決めることでもありません。しかししばしばこのことが起きます。教職者になったほうがいいのではないかと考える人たちは現在もいます。それは理想的な生き方に思われるのです。余暇が充分あって、読書——哲学、神学、そのほか読みたいものは何でも——するのに十分な機会を持てる生活。たまたま詩人の才があれば、詩を書くのにたっぷり時間が与えられる生活。随筆家や小説家であっても同じようにできる生活。説教者の生活がそのように映るので、若者たちの気に入り、そんな調子で教職者になった人も多くいます。

これはまったくの誤りです。聖書から得られる説教者の姿とも、また何世紀も通じて偉大な説教者であった人たちの生涯を読んでも、それとはまったく異質なことは言うまでもありません。こうした誤った考えに答えます。説教は決して人がしようと決める事柄ではなく、むしろ「召命」の自覚が生じることです。召命の問題は簡単ではありません。非常に重要であり、すべての教職者がこのことで苦闘したのです。

「自分は説教者として召されているのだろうか。違うのだろうか。どうしてそれが分るのだろうか。」これには幾つかのテストがあります。一般に、召しは自分自身の霊の内気で気づくことから始まります。すなわち、自分の霊に押し寄せる一種の圧迫に気づくのです。霊的な領域

彼らのために何かをし、メッセージを語り、救いの道を示してあげたいという願望が伴うからです。これが召命の本質的部分です。特に自分自身を点検する一つの手段として有効です。

賜物のある若者がすぐれた説教者の話を聴き、彼とその働きに心奪われてしまうということによくあります。彼の人格とその雄弁さに魅了され、感動を受け、無意識のうちに彼のようにになりたい、彼のように働きたいという願いを感じ始めます。しかし、その道に進むのは正しいかも知れないし、まったく間違いかも知れません。その人は説教の魅力に心奪われ、また聴衆に語り、彼らに影響を与えるという考えに魅せられただけかも知れません。間違った偽りの動機というものはすべてこっそり忍び込むものかも知れません。そこでその危険から自分を点検する方法は、自分なぜこの働きをしたのか、なぜこのことに関心を持つのか、と自問してみることです。もしほかの人々の立場や状態に真心から関心をいだき、彼らを助けたいという願いを見出せないなら、自分の動機を問い直してみるべきでしょう。

私たちは問題をもう少し深く掘り下げなくてはなりません。すなわち強迫感がなければならぬことです。これはもつとも決定的なテストになります。自分にはほかのことは何もできないと感じることです。スポルジョンだったと思います。彼は若者たちによく言いました。

「もし君たちがほかの仕事ができるなら、それをしなさい。もし教職者以外の立場に就くことができるなら、そうしなさい。」私もためらわずにまったく同じことを言いたいです。しか

し、説教者に召されている人は、ほかの何にも満足できないという意味で、ほかのことができない人です。説教することへの召命が彼に臨み、そのような圧迫が彼に重くのしかかるので、「私はほかのことは何もできない。私は説教するしかないのだ」と言うのです。

次に述べることは私の個人的経験からです。召しの確信があつたので、それを隠すことも逆らうこともできないのですが、何とかそうしようと思いましたが、いや、私は今の仕事を続けよう。自分ではできるし、立派な仕事です。」あなたはさまざまの方法で来る霊的な揺さぶりを押し返し、追い払おうと全力を尽すでしょうが、もはやそれができない時点で達します。その自覚が強迫観念となり、圧倒的なものとなり、ついに「自分にはほかのことはできない。これ以上抵抗できない」と告白するのです。

以上が私の理解する説教への召命の意味ですが、これと同じほど重要な事柄によって私はこの召命を点検したいと思うのです。すでに触れたように、自分には自信がなく、無価値で足りない者だとの意識があります。これについてはコリント人への手紙第一、二章ほど完璧な表現はどこにも見出せません。その箇所パウロは「弱さ、恐れ、おののき」について語っています。同じことを彼はコリント人への手紙第二、二章一六節でも繰り返し、「このような務めにふさわしい者は、いったいだれでしょう」と問いかけています。この特殊な働きへの神の召命に関するパウロの教えからして、私たちも詳細に取り扱ったことですが、必然的にそのような

問いが口をついて出てくるのです。彼はそのことを次のように記しています。

しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいます。私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神の前にかぐわしいキリストのかおりなのです。ある人たちにとっては、死から出て死に至らせるかおりであり、ある人たちにとっては、いのちから出ていのちに至らせるかおりです。このような務めにふさわしい者は、いったいだれでしょう。

説教することに以上の点が伴うと気づくなら、自分が無価値で不十分な者だと感じるのとは避けられないことです。ですから、ただためらうだけでなく、自分の気持ちをよく調べ、疑ってみて、注意深く点検すべきです。そしてその召命を全力を尽して押しつけてみるのです。

私がなぜこんなことを強調するかと言えば、なぜかこの時代や世代ではほとんど語られていない召命の一面だからです。しかもこれは信徒説教という考えに反対する私の最終的な論点でもあります。自分を説教者と自認し、何のためらいもなく講壇に駆け込んで説教し、余った時間、片手間に説教できると主張する人のことを考えてみてください。一体彼は「弱さ、恐れ、

おののき」をどう心得ているのでしょうか。悲しいことに、ときには説教者が逆に、牧師職にある説教者についてかなり批判的で軽蔑なことさえあります。彼らは説教以外に何もできない哀れな落伍者だが、信徒説教者は片手間な時間で行う働きだと言うのです。しかし、この批判は偉大な使徒パウロに関する事実とまったく矛盾し、さらにその後何世紀にもわたる教会のすべてのすぐれた説教者に関する事実とも矛盾しています。実際、説教者が偉大であればあるほど、説教することのためらいを感じるようです。そのような人たちは、しばしば教職者や長老など、ほかの人たちに説教するよう説得されなければなりません。彼らは恐れ多い責任に尻込みしたのです。講壇を飾った中でもっとも偉大で雄弁な説教者の一人、ジョージ・ホイットフィールドの場合はまさにその通りでした。ほかの多くの説教者の場合もそうでした。ですから、自分は適任で容易にできると恐れやおののきをまったく感じないであわただしく説教を始めるような人は、決して説教者に「召されて」いないことを公言しているのです。神に召された人は何のために召されたかを悟り、その責務の恐れ多いのにひるむのです。召されているという意識とその強い働きかけとを圧倒的に感じて人は説教するように導かれるのです。

✱

✱

さて、以上の事柄がまず生じて人は説教のために講壇に立ちます。しかし、それさえも点検

証明できる説教者を教会は否認したのです。たとえばキャンベル・モルガン博士はイギリスのメソジスト教会から否認されました。しかしこれは例外です。例外やまれな事例から原則を規定することはできません。私は一般的なことを述べています。例を見ないほど際立った人物がいて、神が特にその人を著名にされることがありますが、そんなことはめつたにありません。これよりもっと頻繁に起きることは、召されていないのに召されていると感ずることです。そこでそれを見きわめ、そのような状況を取り扱うのが教会の働きです。私はこれに関する多くの実例や例証を挙げることができます。たとえば、ある人が私のところへ来て、自分は説教者としての召命を受けていると話すと、まず私がすべき務めは彼の道に私の思いつく限りの障害物を置くことだといつも感じています。それに加えて彼の人格や知性、話す能力について自分なりの評価を下します。その人が感じている事柄と教会が感ずる事柄とが一致することは非常に重要です。スボルジョンについての有名な話はこのことをよく例証しています。ある日曜日の夜、礼拝が終ると一人の男性が彼のところに来て言いました。「スボルジョン先生。聖霊が私に次の木曜日の夜このタバナクルで説教するように告げておられます。」するとスボルジョンは「そうですか。しかし、聖霊はまだそのことを私に告げておられないのはたいへん奇妙ですな」と答えたのです。もちろん、彼は木曜日にタバナクルで説教しませんでした。これはいへん健全な論理です。もし聖霊がこの人にそれを告げたのであれば、スボルジョンにも

され、確認される必要があります。要するに今度は教会によって行われるべき事柄です。その第一の面はローマ人への手紙一〇章にあります。「『主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。』のです。しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じていることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう」(ローマ一〇・一二―一五)。説教者は「遣わされる」のです。しかしこのみことばにあるように、どうしたら私たちは自分で任命したのでなく、「遣わされた」ことを確認できるでしょうか。この点で教会がかかります。この関係は、説教や教育だけでなく、教会のさまざまな働きに関して新約聖書が教えるところです。使徒の働き六章で執事に関する資格が記されています。教会は与えられた原則に従ってこれらの人を選んでいきます。教会は何を求めべきか教えられているので、そのような資格を求めたのです。同じことが牧会書簡にも見られます。そこでは長老や執事たちの資格に関して、幾つかの命令が与えられています。ですから、ある人を説教者として召されていると確定する前に、彼の個人的な召命は教会によって確認され、その真実性が示されなければなりません。

しかし教会の歴史や説教者の歴史を見ると、ときとして教会がこの点で過ちを犯したことはかなり明白です。教会は何度も過ちを犯しました。経歴からも明らかに神に召されていたのを

同じように告げられたでしょう。聖霊はいつでも秩序ある方法で働かれます。

次は非常に微妙な事柄です。この特殊な働きに対するその人の性質や野心もしくは好みからか、彼のうちで説教者になろうとする願望が起き、私たちもこれを神の御霊が導いておられることだと確信してしまうことです。私はこのようなケースを幾つも知っています。ですから教職者が直面するもつとも痛みを感じる務めの一つは、そのような願いを持って自分のところへ来る人を落胆させることです。いかなる根拠に基づいて教職者はその人を落胆させるのでしょうか。そこでその人にも教会にも適用しなければならぬ幾つかのテストがあります。教会は召命があると言ふ人のうちに何を求めるのでしょうか。彼のうちに何か特別のものを求めるのは明らかです。しかし、それ以上の何かが必要とされるのです。

さてあなたなら何を期待するのでしょうか。使徒の働き六章では金銭的な問題ややめの人たちへの配給という慈善的な事柄を扱う執事を任命する場合でさえ、「聖霊に満ちた」人たちがいることが強調されました。それが第一とすべきもつとも重要な資格でした。あなたは尋常でない靈性を見出す立場にあります。説教という働きの性質からして、これこそまず第一にしないでなりません。次にあなたは彼のみことばの知識とその確信の度合いを見出すのです。いつも自分自身の問題や困難、困惑を覚える事柄と苦闘していたり、ごく最近読んだ本に影響を受けて「教えの風に吹き回され」たり、新しい神学の流行にすぐ影響を受ける不安定な状態であ

れば、彼は事実教職に召されてはいません。大きな問題をかかえて自ら困惑の状態にある人は明らかに説教に召されてはいけません。問題をかかえた人々に説教し彼らを助け、その問題を取り扱うのが彼の主要な働きだからです。「いったい、盲人に盲人の手引きができるでしょうか」とは、そのような状態にある人に対する主ご自身の問いかけです。ですから説教者は並でない靈的特質のある人で、しかもみことばの真理についてはしっかりと確信のある知識と理解力を持ち、ほかの人にそれを説くことができると感じている人でなければなりません。

ほかに何をあなたは召命のあるという人に期待しますか。ここで一般に性格と呼ばれるものについて考えてみます。私は「聖霊に満たされている」ことを性格だとは見ません。それは生き方の特色が敬虔であるという意味で、これは聖書の中で私たちに明らかにされています。その例としてテトスへの手紙を見ます。「同じように、若い人々には、思慮深くあるように勧めなさい。また、すべての点で自分自身が良いわざの模範となり、教えにおいては純正で、威厳を保ち、非難すべきところのない、健全なことを用いなさい。そうすれば、敵対する者も、私たちについて、何も悪いことが言えなくなつて、恥じ入ることになるでしょう」(二・六一八)。説教者は神を恐れる人でなくてはなりません。しかし同時に、知恵がなくてはなりません。それだけでなく忍耐と寛大さも必要です。このことは説教者にはとても重要です。パウロはそのことを「主のしもべが争つてはいけません。むしろ、すべての人に優しくし、よく教

え、よく忍び」(Ⅱテモテ一・二四)と述べています。

以上の事柄は説教者の基本的な資格です。立派なクリスチャンで、ほかの事柄が備わっていても、もしこれらの資格に欠けているなら、その人は説教者にならないほうがよいでしょう。それに彼は人々とその人間性について理解できる人でなければなりません。これらは私たちが求め、また強く要求しなければならない一般的な資格と特質です。

さて、能力の問題は前述の資格が強調されてから問われる事柄です。現代の教会の悲劇の一つと思われるのは、能力を第一に置く傾向があることです。それは第一とすべきことではなく次の段階での問題です。確かにそれは大事で考慮すべき事柄です。何年も前に一人の若者が私のところに来て、自分は確かに説教者に召されていると語ったことを覚えています。彼がそう話したこともそうですが、ほかの点が私を一層心配させることになりました。前の日曜日、私はたまたま自分の教会を離れていたので、一人の説教者が代りに説教してくれました。私のところに来たその若者はこの説教者のところに行き、自分は説教者に召されているように感じると話したのです。彼のことを何も知らないその説教者は彼を励まし、ほめそやし、この話を進めるよう彼を駆り立てました。しかし、かわいそうにこの若者は説教者に必要な知的能力に欠けていました。あまりにも明白でした。彼は予備試験にさえ合格できなかったでしょう。かりに何とか通ってもこの働きに要求される知的能力に欠けていたのです。ですから、私たちは当

然知性と能力を強調しなければなりません。「みことばを正しく伝え」ようとするなら、能力が必要です。使徒パウロも「教える能力があり」と記しています。説教とはすでに述べたように神の使信を伝えることで、それには組織神学と個々の聖書本文の正確な意味との関係という事柄が含まれます。それである程度の知性と能力が要求されるのは明らかです。もしその点で基本的な最小限度の特質を欠くなら、彼は明らかに説教者に召されてはいないのです。

私はさらに「語る賜物」も加えたいと思います。もう一度言いますが、これは確かに私たちが今日忘れかけていることです。説教の働き、すなわち実際に語ることの役割を強調してきたのもこのためです。説教者とは何でしょうか。まず彼は話す人であることです。そもそも彼は本を執筆する者ではなく、随筆家でも文学者でもありません。第一に話し手なのです。志願者に語る賜物がないなら、ほかにどんな賜物があっても説教者になるべきではありません。すぐれた神学者で、個人的なアドバイスを与えたり、カウンセリングすることにすぐれ、何でもできる人であっても、基本的な定義として話す賜物がなければその人は説教者になれないのです。

もう一つの例を挙げてこのことを説明します。ある一人の若者のことですが、彼はたいへんすぐれた科学者で、自分の専門分野ですつと立派にやってきた人です。彼は私のところに来て、自分は確かに説教者に召されていると言ったのです。しかし、私はすぐに彼が間違っていると分りました。なぜでしょう。それは私に何か特別な洞察力があったからではなく、彼は人

前ではもちろんのこと、個人的な会話のときにも自分の考えをうまく表現できなかったからです。たいへん有能でしたが、明らかにこの伝達の賜物は持ち合わせていなかったのです。自由に話すことができず、話し方もためらいがちで途切れ、不明瞭で自信のないものでした。私は彼が訓練を受けるのを思いとどまらせようと全力を尽しました。しかし、自分の召命を強く確信していた彼は私の言うことに耳を貸そうとはしませんでした。彼は神学生となり、オックスフォードでたいへん立派にやり遂げ、ついに牧師に任命されました。七年間ほどで三つの教会で奉仕されたと思います。しかしその結果、彼は自分が説教者に召されていないと極めて明確に分ったのです。彼は科学者の働きに戻り、現在立派にやっています。この働きこそ彼がとどまるべき場でした。なぜなら彼には語るというこの本質的で特殊な賜物に欠けていたからです。

これらの特殊な要点はもつとも重要なものです。私は過去四十年間、幾度となくこの問題を扱う立場にいた者として話しています。私の言うことを例証するもう一つの話をしましょう。この召命に関する誤りは、ときには本人より教職者や長老たちがその人に説教者になるようほのめかし、実際彼をせき立て、圧力をかけることにあります。ある日曜日夜の夜のことでした。説教の後、私は自分の書齋に戻りましたが、一人の若者が私に会いにはいつて来ました。彼はとても動揺している様子なので、私は「どうしたのですか。何か私にできることでも」と言うと、彼はあまり時間を取らせたくないが、一つのことだけ知りたいと言いました。それは私が

クリスチャンの精神科医をだれか知っているかということでした。「ところで、なぜあなたはクリスチャンの精神科医に会う必要があるのですか」と尋ねると、彼は「私はとても困っています。どうしようもないのです」と答えました。そこで私は彼にその困惑の原因を尋ねました。話は途中でですが、もしある人に精神科医の助けがほんとうに必要なだとあなたが確信できないなら、そこに送るべきではありません。と言うのも、私の経験では精神科医の名前を尋ねて来る人の大部分は、精神的治療よりむしろ霊的な助けを必要としているからです。ともあれ、私は「なぜあなたは精神科医に会う必要があるのですか」と彼に尋ねました。すると彼は再度「私はとても困惑しています」と答えたので、私が「その原因は何ですか」と聞くと、彼は自分のことを話してくれました。彼は伝道者の訓練のため最近建てられたある大学で二週間学んだのです。それまで彼は英国西部でパン屋をしていました。彼にはたいへん上手に歌う賜物があるので、よくその地方の教会の働きを助けました。最近、この小さい町で伝道集会があつて、彼は毎夜独唱しました。集会の最後に、そこを訪れていた伝道者はこの若者に近寄り、

「君は自分で説教者に向いているとは思いませんか」と言いました。彼はこの若者にあれこれと話し、ついに彼をほんとうに牧師になるよう説得してしまつたのです。もちろん多少の訓練は必要だということで、その伝道者は、幸いにもすぐにはいれる大学があると彼に教えめました。こうして彼はその若者をこの新しい大学に送り、彼はそこで二週間過したわけです。しか

し今、彼はたいへん困惑して私のところに来たのです。「何があったのですか」と尋ねると、「私は講義について行けないのです。ほかの学生はノートを取っていますが、私はノートの取り方が分らないのです」と答えました。読書の経験もあまりなく、講義を受けたこともなかったのも、今彼はまったく困惑しているのです。その伝道者は彼を説教者に召されていると語りましたが、彼こそそのような願いを持つ人を問い正す立場にあったのです。しかもその若者はもう学びを続けられないと感じていたので、悲しくなり困惑して、彼はその大学の学長のところに行きました。ところが彼の話の話を聞いてその学長が最初に言ったことは、「君は精神科医に診てもらったほうが良いだろう」ということでした。最近これが行き詰まりを感じるクリスチャンに対するお決りの忠告になっています。そういうわけで、この若者はクリスチャンの精神科医を捜していたのです。私は彼に言いました。「あなたは精神科医に診てもらふ必要は全然ないと思います。困惑してこれ以上続けられないと感じていること自体、あなたが本心に立ち返っている証拠です。あなたは健康な状態で、健全な精神を持っていますよ。」さらに「あなたが精神科医に行くべきときは、その伝道者の言ったことを信じて、大学に行ったときですよ。今あなたは現実に置かれている立場が分かりました。帰ってもう一度パン屋の仕事をしてください。そして神があなたに与えられた賛美の賜物であるその声を用いてください。教職者に召されていないことを認めて、自分のできることを続けてください」と付け加えました。

✦

✦

た。その若者はほんとうに知的な備えがなかったのです。彼自身そのことを知り、はっきりと理解したのです。彼はすぐに安心して、喜んで私のもとを去って行きました。彼は私の忠告に従い、その地域教会で神の栄光を現す貴重な賛美の奉仕をしたのでした。

以上が召命を受けていると言う人を教会がテストする方法です。私の主張は、神は召された人自身と教会の声を通して働かれるということです。同じ御霊が双方に働かれるのです。そこに意見の一致と合意があるなら、それは神からの召しだと考えるのは正しいことです。人は自分で自分を任命したり、教会の圧力によってその働きに就けられるのでもありません。この二つのことが一致しなければなりません。しかし、両方とも軽視されてきました。私は思い違いをした多くの人を知っています。また、決してその働きに向いていないのに、教会側の誤った教えによって教職者に押されてしまった人の事例も多く知っています。この二つは調和しなければなりません。

✦

✦

さて、やっと最初のステップにきました。福音を伝えるよう召された人がいます。今度は、

こうして福音を説教する働きに召された人の訓練と備えの問題に触れます。私は神学校の問題を議論したり批判するつもりはありませんが、ついでに一般的な事柄を二、三述べたいと思います。私は教職の訓練という問題は緊急に見直されなければならず、根本的、徹底的な変革が必要だと考えています。召された人は訓練を通して何を必要とするのでしょうか。まず何よりもある程度の一般的知識と人生経験が必要です。クリスチャンとして回心の経験があっても、それだけで説教者に適しているとは言えません。説教者に召されていない人々でも同じだからです。さらにある程度の一般的知識と人生経験が必要とされます。

なぜこのことを強調するかと言えば、これに欠けている場合、説教があまりにも論理的、知性的になってしまうからです。おそらく講壇に立つても、人々の問題を取り扱うことより、自身自身の問題を扱うようになるからです。しかし、説教者が講壇に立つのは自分の個人的問題や困難を解決するためではなく、人々に説教し、彼らを助けるためです。そこでこれを防ぐ安全装置となるのは、彼が多少一般的な知識と人生経験を持つことです。これは多ければ多いほど良いのです。教職の働きにはいる人はだれでも何かの職業に就いて世の中の生活を経験しておくことは大切だと言う人がいますが、私も賛成です。若い人が学校や大学を卒業して、まっすぐ神学校へ行き、外の世界の経験がまったくなく教職の務めに就くことのできる制度に、彼らは疑問をいだいています。少なくとも説教が非常に論理的、知性的に取り上げられ

る危険があるからです。実際講壇に立つても、彼の語るのを聞いている人々の生活と分離してしまうのです。ですから、一般的な知識と経験は計り知れないほど価値があります。

そこで私は一般的な知性の訓練の重要性を大いに強調します。私たちも皆知的な訓練を受ける必要があります。すぐれた知性を持っていても、それは訓練される必要があります。芸術であれ科学であれ、どの学習過程においても一般的な知性の訓練はかなり重要です。それによって組織的・論理的に思考し、推論する方法を教えられるからです。このことを強調するのは、すでに考えたように、メッセージには思想の前提と発展の要素がなければならないからです。この目標に達するにはある程度の訓練が必要です。整理しないで手当たり次第多くの考えを話すことは、会衆の益になりません。こうした一般的な意味で説教者は自己の知性を訓練してもらう必要があるのです。それでこのような知性を生み出せるかぎり、特別な訓練形態は重要ではありません。こうして訓練された知性は説教者の特殊な責務に充分適応できるものとなります。

同様に、説教者とその説教にも一般的な知識や情報は大きな価値があります。それは語るメッセージを例証し、それを装う助けとなり、人々がそれを理解し消化するのを容易にしてくれるでしょう。

ここで一般的訓練のことを離れ、特殊な訓練について触れます。何が重要なのかその概要だけを述べます。まず第一に聖書とその使信に関する知識が与えられなければなりません。これ

が不十分であれば、説教者にはなれません。私はすでに「神のご計画の全体」を強調しました。すなわち救いの全体系とその計画です。それに「組織神学」の重要性も強調しました。完全な聖書の知識、すなわち聖書全体とその使信に関する知識がなければ、それらを自分のものとすることはできません。ですからこれは訓練に絶対必要な部分です。

ところで原語の知識はどう位置づけられるでしょうか。正確さを期すには非常に重要です。しかし、それ以上のものではありません。正確さを保証するものではないが、それを助長してくれます。また原語の知識は説教技法の一部となっていますが、大きな位置を占めるとしても絶対必要なものでもありません。しかしそれは大切です。説教者は正確であるべきですし、学識ある会員から誤りを指摘されたり、誤った解釈に基づく事柄を決して語ってはならないからです。こうした点で原語の知識は重要です。しかし、訓練の究極の目的はその人を説教することができるようにすることです。すなわち、聖書の使信を会衆——大部分は言語や哲学の専門家ではありません——に伝達できるようにすることです。彼の務めは人々にその使信を伝え、「人々に理解させる」ことです。このことを決して忘れてはなりません。訓練の目的は何も学生を言語学のすぐれた専門家にすることでも、正確な人間にすることでもありません。

なぜ私がこのようなことを述べるかと言えば、今日あまりにも多くの訓練が、ひからびた骨のように否定的な批評学に時間を費やし、聖書の使信よりもそうしたことにますます関心をい

だくようになっていくからです。彼らは「木を見て森を見ず」で、今現実に自分たちの目の前にいる人々にメッセージを伝達する説教者になろうとしていることを忘れていきます。もし彼らがすべての時間を批評の問題——高等批評やそれに対する弁護や答弁——に費やすのに夢中になり、それがすべてだと考えるならば、説教とは何かを分らず、「飢えた羊が目を上げてても食物が与えられない」こととなります。すべてこれらは足場の一部に過ぎません。これについては後で述べます。足場を組むだけでやめてはなりません。建物にとってそれは予備的なものに過ぎません。身体の骨組みからこのことを考えてみてください。骨格は不可欠ですが、それだけなら奇怪で、肉体で覆われる必要があります。

続いて神学の学びに移ります。すでにこれまで述べたことから明らかですが、聖書を知っているだけでは不十分です。聖書の中からその神学の本質を捉え、それを体系的に把握できる。このような意味で聖書を知っていなければなりません。このことに精通すると彼の説教は聖書の神学によってコントロールされるのです。

次に教会史の学びについて述べます。私は特に異端の危険について学ぶことの重要性を強調します。ある人は立派なクリスチャンで、経験も豊富にあり、もう何も必要としないと考えているかも知れません。つまり聖書もあり、自分の内に神の御霊をいただき、善いことも行うようになっている。それで自分にはまったく危険はなく、問題がないと思っています。ところがい

つの間にか自分が異端であると非難を受けることがあるのです。これには当人も驚きあざんとします。このようなことから自分を守るには異端——どのように過去にそれらが、概してとも善良で良心的な人たちを通して起きたか——について学ぶことです。教会の歴史を見ると異端がいかに巧妙なものが分ります。多くの人がいかに信仰のバランスを失い、調和を欠いてしまうか、また悪魔によって聖書全体のメッセージと各部分との相互関係が、どのように特定の面が強調され、ついに彼らが見ることばの真理を否定して異端になったのかが分ります。ですから説教者にとって教会史は計り知れない価値があります。これは学問の領域での事柄ではないのです。自分に何が起きたか分らないうちに異端や過ちに陥る恐ろしい危険を教えてください。だけでも、教会史は説教者にとっても不可欠な学びです。

教会史はまた教会の歴史における大きなリバイバルについても教えてください。自分自身の経験として、リバイバルの歴史ほど私を元気づけ、助けとなり、強壯剤の役割を果たしてくれたものはほかに知りません。私たちの今生きている時代を考えてみてください。何と気落ちするような時代でしょうか。あまりにも落胆的なので、聖書を心から信じ、内に聖霊をいただいている人でさえ、ときには失望し、絶望の淵に投げ込まれてしまいます。そのような状態のとき、教会の歴史でこれと似た時代があったことを知り、神がその時代をどう扱われたかを深く教えられること以上に励ましを受けることはありません。後の講義で取り上げますが、説教者

は一個の人間でさまざまな側面から攻撃されます。おそらくその最大の危険は落胆して落ち込むことです。そしてもうこれ以上は続けられないと感じるので。教会の歴史、特にリバイバルの歴史はこれに対する最良の解毒剤なのです。

フランスの小説家アナトール・フランスは疲れを感じて落ち込み、やる気をなくするようになると、「私は気分転換や休暇のために田舎へ出かけることはしない。その代りいつも十八世紀へ行くようにしている」と言うのを読んだことがあります。しばしば私もこれと同じことを言いました。もちろん彼とは同じ意味ではありませんが、私も気落ちし、疲労困憊するときには十八世紀へ出かけて行きます。ジョージ・ホイットフィールドは決して私を失望させたことはありません。十八世紀へ出かけてください。この世紀が経験した聖霊の大きなうねりと働きの歴史を読んでいただきたいのです。それはあなたが知りえるもつとも心沸き立つ経験となり、もつともすばらしい強壯剤となります。説教者には計り知れないほど価値があり、これと比較できるものではありません。このように、説教者は教会の歴史を学べば学ぶほど良くなります。

6 説教者

それでこの訓練期間に過去の偉人、すなわち偉大な聖徒や説教者の伝記に親しむのも良いでしょう。それは失意のときすばらしく元気づけてくれるだけでなく、高慢になったときや得意な気分になったとき、謙遜にしてくれるからです。これは励ましを受けるのと同じくらい必要です。実際に説教するようになり、一つか二つメッセージを語ると自分がいっばしの説教者に

なったかのように考えてしまいます。これに対する最良の療法はホイットフィールドやジョン・エドワーズ、スボルジョンなど有能な神の人について読ませることです。直ちに彼は現実へ引き戻されるでしょう。

最後に説教法について述べます。私にとってこれはほとんど嫌悪すべき事柄です。『説教構成の技法』、『説教例話の技法』などと標題のついた本がありますが、私にとってそれは墮落です。確かに説教法はありますが、ただあるというだけのことです。

ところで説教すること、すなわち語る働きについての訓練はどうでしょうか。これについては一言だけ述べますが、これは教えられるものではありません。それは不可能です。説教者は産み出されるのであって、造り出されるのではないのです。これは絶対的なことです。そもそも説教者の器でない人を教えて説教者にすることはできません。『説教入門』とか『簡単にできる説教』という本を持っているなら、できるだけ早く火に投げ込むべきです。もし説教者として誕生している人に対してなら、あなたは多少助けになれるでしょうが、あまり多くはできません。たぶんその人は少しずつ改善されて行くでしょう。

ではそのような改善はどのように達成されるでしょうか。多少矛盾しているかも知れませんが、要するにそれは説教の授業によるものではありません。一人の学生が他の学生に説教し、その内容や態度などを彼らに批評させる方法ではできません。私はそのことをぜひ禁じたいので

す。そのような状況ではメッセージは間違った目的で語られ、聞く者も間違った態度で聞くからです。聖書のメッセージは決してそのような態度で聞かれるべきではありません。常にそれは神のことばです。恐れ敬う心をもってメッセージを受け入れようとする信仰からの期待がないのであれば、だれも聞くべきではないのです。

ビデオテープなどという近代的で精巧なものが登場し、自分の身振りなどを後で見ることができますが、私にとってこれは極めてふらちに思われます。「講壇での動作研究」とか「テレビでの動作研究」についても同じことが言えます。これらのことを一言で言うなら、完全な墮落であり、振舞いを教示するなどあってはならないことです。しかし、説教者はいつも自然であって、人前を気にしないようではなりません。訓練の中で手や顔の仕種を意識させるようなら、その人に大いに害を与えます。そんなことは行われてはならず、禁じられるべきです。こんなやり方で説教者を訓練できるはずがありません。そんなことは私には神のことばに對する冒瀆のように感じられるのです。

6 説教者
それなら若い説教者はどうしたら良いでしょうか。経験のあるもつともすぐれた説教者が語るのを聴かせることです。消極的面でも積極的面でも、多くのことを彼らから学ぶでしょう。何がいけないか、何をしたらいいのか、多くを学べるでしょう。説教者たちが語るのを聴いてください。またメッセージを読んでください。しかも必ず一九〇〇年以前に出版されたものを

です。スポルジョン、ホイットフィールド、エドワーズ、それに偉人たちのメッセージを読んでもください。彼らもピューリタンのメッセージを読み、大いに助けを得たからです。彼らはピューリタンを糧として生きていたように思われます。ですから若い説教者は逆にこれらの人を糧とし、彼らを通してピューリタンへと導かれるようにすることです。ピューリタンと十八世紀の人たちの説教とには一線を画す大きな違いがありますが、これについては後で詳しく述べます。私自身は十八世紀の人間です。十七世紀ではありません。しかし、十八世紀の人たちが十七世紀の人たちを用いたように、私も十七世紀の人たちを用いることの価値を確信します。

さて以上の事柄から何が第一となるのでしょうか。ごくわずかなものを除きこれらの技法のどれでもありません。それなら何が大事でしょうか。まず神の愛です。それに魂に対する愛、みことばに関する知識、そして自分の内に住んでいくださる聖霊です。これらの事柄が備わって説教者になるのです。神の愛がその人の内にあり、彼に神に対する愛があるなら、また人の魂に対する愛と心遣いがあり、聖書の真理を知り、御霊がその内におられるなら、その人は説教するようになるでしょう。以上のことが大事なのです。ほかの事柄を正しく位置づけることが大切です。助けになりますが、それ以外のどんな立場も占めてはならないからです。

次の章で私たちは説教を聴く人々を考察します。そのとき説教者の訓練に関してより深い事柄を発見できるでしょう。

7

会衆

私たちはなおも講壇に立ち大勢の人に説教する人について、その概要を考察しています。すでに説教者とその召命として彼が何をすべきかを概観しました。ここで、席に着き説教者の語ることに聞き入る人々を考察することも、同じほど絶対に必要なことと思われまます。説教者は結局それらの人々に向かって説教するからです。彼はただ立って人々に自分の考えや意見を表明したり、聖書の教えに関する論理的、学問的な考察を与えるのではなく、説教者が講壇に立つのは、第一に彼らにすなわち彼が語るべきことを聴こうと集う人々に語るためです。

そこで会衆席と講壇、すなわち会衆と説教者との関係という問題が生じるのです。これは現在、新たにとても重大な問題となっています。この関係に対する古い伝統的な考えは消えつつあると思われるからです。ともあれこの関係は真剣に問い直されていて、先の主題である説教者の訓練ともはつきりとした関係があります。会衆席と講壇との関係は、明らかに説教者の訓練にも影響を与えずにはおきません。しかも現在この影響がますます明瞭になっています。

今日見られる新たな要因としては、明らかに会衆席側にたいへん重きが置かれていることです。過去には、講壇は会衆からかけ離れたものとする傾向が強く、説教者を尊敬するあまり、会衆席の人々にとって説教者は、ときには偶像になりかねないほどでした。これはエディンバラの有名な教会ですぐれた学識のある教授が説教するのを聞き、礼拝を終えて帰ろうとしていた気の毒な女性の話です。だれかが彼女に質問しました。あなたは説教に満足されましたか。彼女が満足したと答えると、彼はさらに突っ込んだ質問をしました。「あなたは彼の言うことが分りましたか。」それに対して彼女は「あのような偉大な方の言うことを理解できるなどと考えるのはとんでもないことです」と答えたのでした。これはしばしば見られた古い態度です。しかしそれはもう過ぎ去り、もはやそのような状況ではありません。今や会衆席が自己主張し、多かれ少なかれ、講壇に注文をつけるような新たな立場になっています。

このことは多くの異なった面に現れているので、異なった角度からの説明を幾つか紹介します。たとえばある作家は言います。「世界は良い説教の欠乏ではなく、良い聴衆の欠乏のゆえに滅びつつある。」これは会衆席にいる聴衆に対する批評ですが、今日の重大な問題は良い説教がないからではなく、良い聴衆がいないことにあると感じています。しかしどんな形式の批評であれ、強調されているのは現代人と私たちが直面している今日の状況です。アムステルダム自由大学の神学者キューイタートはヨーロッパで次第に人気を得ていますが、次のように

言っています。「しかも今日、教会で神の世界を通して自分の歩む道を見出そうとしても、クリスチャンにはまったく何の役にも立たないことだ。」これは伝統的な神学と伝統的な説教のあり方に対する彼の批評です。さらに彼は「信仰と仕事とは切り離すことはできないと確信している多くのクリスチャンは、多かれ少なかれ、この時代の諸問題の中でどのようにこの一致に焦点を合せられるかを見出せないでいる」点を強調しています。彼はさらに「私たちは問題をよく知らなければならぬ。私たちが今置かれている時代と場所で何が問題となっているかを。今こそ真理が実行されなければならないのだ」としきりに強調しています。「今こそ」、「今日の状況」、「今日の人間」という言葉に注目してください。同じ主張がブルトマンにも見られます。福音を非神話化しようとする彼の根本的な論点は、科学的背景やものの見方を持つ現代人に福音——すなわち彼が伝えたいと熱心になっているメッセージ——を信じるのを期待するのは、それが彼らに受け入れがたい奇跡的要素と結びついている限り、おそらく無理だと言うのです。言い替えると、現代人が「受け入れられる」、これが決定的要因となっているのが分るでしょう。これは「成人に達した人」の会話や特徴的な現代の常とう句と同じです。

衆 7 会 衆
そこで私たちはこうした態度がどのように表明されているのか、よく見極める必要があります。まず「一般の人々」への福音のアプローチにおいてその態度が見られます。今日、人々は新聞やテレビや映画によって生じるものの方や考え方に非常に慣れているので、筋道を立て

て考え論証する陳述にはついて行けないと言われます。ですから、彼らは合理的、論理的な陳述について行けないのです。そこで私たちは彼らに映画やスライドを見せたり、映画スターを連れて来て彼らに話させたり、ポップシンガーに歌わせて「短い演説」や証しをしてもらい、その合間に福音をほんの一言語ってもらうのです。「雰囲気を作ること」が大切で、終りにごく短く福音が語られるだけです。

この態度を示すもう一つの形式は、人々は聖書の用語を理解できないので、義認や聖化また栄化について話しても意味がないという発言があることです。私たちは「ポスト・クリスチャン」の時代に生きている。それでこれらの用語は今日、説教には最大の障害で、人々は私たちが用いる言葉が理解できないでいる。しかもそれらは古風な響きがあり、現代的でも今日的でもない。これらのことを悟らなければならないのです。この結果、普通の日常的な言葉が使われ、神を「なんじ」と言わず、「あなた」と呼ぶ新しい聖書の訳が大流行するようになります。現代人は「なんじ」という言葉を聞くと、もう福音に耳を傾けることが不可能になり、ましてそれを信じるのはなおさら不可能だということです。そこで私たちは用いる言葉を変え、聖書の訳を新しくし、祈りや説教や私たちの宗教活動すべてにそのようにすることがたいへん重要だということです。以上の事柄は、会衆席が講壇を支配していると見なされる現代の態度が、一般の人々に対してはどう表明されているかを示すものです。

知識人に関しては、ものの見方が科学的で進化論を受け入れ、三次元の世界などありえないとするまったく科学的な見方を持っているので、私たちは聖書はただ救いと宗教的な体験や生活に関する事柄だけを扱っていることを明確にしなければならぬ。もし私たちが聖書と自然（科学者が詳述するような）は啓示の補足的かつ權威ある現れであることを示せなければ、現代の理知主義者をつまづかせ、福音に耳を傾けようとさえしなくなるだろう。それで私たちは、過去にも行ったように世界と人間の起源、墮落、また歴史における奇跡や超自然的な存在について語るのを止めなければならない。だから私たちはただこの信仰のメッセージにだけ集中しなければならぬと言います。むしろこのような主張は何も新しいことではありません。リッチュルは百年前にすでにこのことを述べています。今それが新しい形態をとって舞い戻っただけです。

もう一つの、しかも次第に強調されている点は、知的な現代人は詭弁的で、近代の文学、芸術それに近代的服飾や小説、これらに特有な言葉で物事を考えている。それで彼らの慣れているそのような言葉で話さなければ、何のインパクトも与えられないと悟るべきだと言うのです。私たちはこれが現代人の支配的な考え方であることを理解しなければなりません。何か月前ではないのですが、イギリスの宗教的定期刊行物の中の一冊の本に書かれていた論評に、こうした態度を例証する驚くべき記事を見ました。その著者は論評を終えるにあたり、次のよ

うに述べていました。もしすべての説教者がこの本を読むなら、説教することに新たな希望が生れると私は信じる。なぜならこの本は説教者に土曜日の夜はテレビで「土曜劇場」を見て過ごすのがとても有益であると気づかせてくれるからである。何と「土曜劇場」を見ることで説教者が現代人の心理ともの見方と流行語を知り理解できるので、日曜日の説教がより適切なものとなり、これが日曜日のために説教者が備える方法だということです——祈りも瞑想もなく、ただ「土曜劇場」と「現代人の心理」を理解するだけで。

このような考えを示すもう一つの形態を述べます。現代の高度の知識人は独断的な主張を特に嫌い、講壇からの古めかしい独断的な宣言にはどうしても我慢がならないという点が強調されます。現代人は学識があるので「言い負かされる」ことを好みません。学識では講壇に立つ者と同等かもしくは彼らのほうが上かも知れません。それに彼らは物事を注意深く合理的かつ科学的に調べ、可能な限り異なった見解を打ち建てるといふやり方に信頼を置いています。実際私は最近、福音的学者の団体のある雑誌で、今講壇がすべきことは聖書を、特に最新の訳のものを声を出して読み、それから幾つか質問を受け、それを討議することであるとその効用を弁護する記事を読みました。一人の人が講壇に立つて聖書の教えを語り伝え、それを「あれこれ話す」よりもっと「知的な礼拝」になるということです。会衆の参加は不可欠となり、講壇に立つ者はみことばを幾つか違う訳でゆっくり知性的に読み、それから討論が始まります。意見

の交換や比較、対話があり、これが今日の礼拝のあり方だということです。

さらに教職者の訓練に関する実際のな面では、この新たな態度は次のように現れています。もし説教者がある程度工場で働いた経験がなければ、工業社会に説教するのはまったくふさわしくないということです。説教者はすべて学問的訓練を終えたら、工場で働くべきだというまじめな提案があります。説教者は彼らの言葉や表現の仕方を理解できるようにでなければならぬ。そのような経験がなくて彼らに説教するのはほとんど不可能だということです。

✱

✱

以上私は一般的な会衆の立場とそれがごく一般的にどう表されているかを述べました。そこで私たちはそれにどう答えるべきでしょうか。一体会衆席はどこまで講壇を支配できるのでしょうか。しかし、こうした新たな考え方は、次のような理由からまったく間違っています。私の考えを一般的なものと特殊なものに分けます。一般的に言えばまず第一にそれは事実からも経験上からも間違っています。状況の認識に間違った心理的理解があるのです。

衆 これをもう少し詳しく述べましょう。私には決して忘れられない出来事——それがこの点を明確にする一助と考えるので述べます——があります。二十七年ほど前のある日曜日の朝、オックスフォード大学にあるカレッジ・チャペルで私は説教しました。私はそこでもほかでする

と同じように説教しました。しかし、礼拝が終つて講壇から降りる間もなく、学長夫人が私のところへ駆けつけて来て言いました。「お分りになりますか。今日の礼拝は私がこのチャペルで体験した中で、もっとも注目すべきものでした。」私は「どういうことでしょうか」と尋ねると、「これまで私たちはこのチャペルで説教を聞いてきましたが、私たちを罪人として説教してくださったのは、文字通りあなたが最初でした。ここはオックスフォードの中のカレッジ・チャペルなので、ここへ来る説教者は私たちを知識人だと考え、どなたも学識高い知的説教を準備するのにたいへん苦勞されているのが分りました。ある方はあまり知性豊かとは思われないのに、無理をして精一杯の学識と教養とをしぼり出そうとすることです。そのため私たちは靈の糧を受けることなく、感動することもなく立ち去るのです。私たちはそのような隨筆を聞かされ、魂は乾いた状態です。オックスフォードに住む私たちも、やはり罪人だということをあの人たちは理解していないようです。」これが高い知性のある学長夫人の眞実の告白です。

私は勤勞者クラス地域にある教会でよい働きをされた一人の説教者を知っています。その後、彼は別の町の郊外にある教会に招聘されました。しばらくして気づいたのですが——彼が私と同じ長老管轄区に來たので——彼は疲れて、気が張りつめているように見えたのです。私はそのことを彼に話したことがあります。ある日、彼と一緒に話していたとき、彼はたいへん張りつめて、疲れていることを認めました。「ところでどうされましたか。経験も豊富で、ほ

かの教会では何年も成功を収められたのに」と私が言うと、彼は「お分りのように、現在の会衆は違ったタイプの人たちです。私は郊外に住む人々に説教しなければならぬのです。」知的職業の人もいれば、商売で成功を収めて郊外に移り住む人もいます。かわいそうに彼は自分でそのように人々を評価し、たいへん知的な説教を生み出そうと努力したのです。しかし、實際彼の属する会衆は彼の説教の潤いのなさに不満を漏らしていました。彼らが求めたのはそのようなものではなかったのです。説教に対する誤った態度のために、結局彼は自身を殺してしまったと言えます。彼は健康を損ねてしまい、比較的若くして亡くなりました。人々が求め、必要とし、期待していたのはそのようなものではなかったのです。

さて一般的に今日の人々は長いメッセージに耐えられません。そこでそのことに関する話をします。一年前病氣をしたとき、たくさんの手紙をもらいました。次の手紙はほかのどれよりも私が大切にしているものです。ところで現在の基準からすれば、私の説教観は間違っていると言わなければなりません。説教は長く——四十五分くらいですが——なりがちです。もちろん、物語に時間を費やすようなことはないのですが。ところで私が大切にしているのは十二歳になる少女からの手紙で、彼女はその兄弟それに両親を代表して書いたのです。彼らは私の健康の快復と早く講壇に戻れることを祈っているということでしたが、その理由がともううれしいものでした。「なぜなら、あなたは私たちが理解できるただ一人の説教者だからです」と

あつたからです。現代の説教観や理論からすれば、私は分りやすい説教者ではなく、むしろ教師です。私のメッセージには多くの理屈や議論があります。最近回心した人には私の説教を聞かせに連れて来ないとか、回心しそうな人には絶対勧めないという人たちがいると聞いたことがあります。あまり負担になって彼らが行けなくなるだろうというのです。しかし、初期の段階はそうであっても後で必ずついてきます。一人の幼い子供が「あなたは私たちが理解できるただ一人の説教者です」と言っています。私は彼女の言うことは正しいと確信します。

このことを確信する事柄として、回心して成長した人々がしばらくして私のところに来て、自分たちに何が起ったかをよく話してくれます。そのとき私は「初めて教会に来たときは、あなたの言うことが全然分りませんでした」とよく言われます。それならなぜ続けて来たのかと尋ねると、繰り返し聞かされたのは次のような言葉です。「全体の雰囲気の中に私たちが引きつけ、その正しさを感じさせる何かがありました。これが私たちを来続けさせるようにしたのです。そして無意識のうちに真理を吸収しているのが次第に分り始めました。そしてそれが私たちにとってますます意味あるものとなりました。」彼らはほかの人たちと同じようにメッセージから多くを得られなかったのですが、何かが彼らを捕え、それが彼らには大きな価値あるものでした。しかし次第に理解力がついて、今や礼拝とメッセージのすべてを享受できるようになっています。これはごく一般的な私の経験です。要するに異なった段階の人々が御霊の影

響力によって自分たちに必要なことや有益なことを引き出すことができるからだと思われる。だからこそ知性や理解力また知識や教養の異なる混在した会衆に説教でき、だれもがそこから恩恵を引き出すことができるのです。

さらにこの現代の説教観は幾世紀もの伝統からもまったく反駁されてしまいました。私たちはこの世界に住む最初で唯一の人間ではありません。私たちは自分たちがあたかも特殊な人種であったか、現在そうであるかのように話す傾向があります。しかしそれは違います。この世界にはいつも異なったタイプの人々がいます。ルターが言いたかったのはそのことです。「説教者は学識のない人々に単純、率直、かつ平易に話す技巧を持たなければならぬ。なぜなら、教えることは訓戒すること以上に重要である」と彼は述べています。さらに彼は「私は説教するとき、会衆には医者や長官が四十人以上いるが、彼らには目をとめない。私は自分の目を貧しい女性や子供たちにだけ向ける。それで、もし学識ある者が聞いて満足できなければ、玄関の戸は開いているのだ」。確かにこれは正しい態度です。「医者や長官たち」は講壇にいる説教者は自分たちに配慮が足りないと感じるかも知れません。しかし、賢明にもルターは彼の目を貧しい女性や子供たちから離さなかったのです。もしすぐれた学識のある人が何も得ることはないと感じるなら、その人自身責められるべきです。霊的な事柄に通じておらず、霊的な真理を受け取れないからです。頭だけの知識を「誇り」、うぬぼれ、自分が心も魂も持つ存在であ

ることを忘れていたなら、彼こそ責められるべきです。もし出て行くのなら、彼の負けです。もつとも説教者が真に神のこぼを語っている場合のことですが。

この点を強調するために私の経験をお話しします。奇しくもこれもオックスフォード大学で起きたことです。一九四一年、私はその伝道礼拝で説教するように招かれました。日曜日の夜、私は最初の伝道礼拝で聖マリヤ教会の中にあるジョン・ヘンリー・ニューマン——後のニューマン枢機卿——の講壇で説教する巡り合わせになりました。そこは彼がまだ英国国教会にいたとき説教した教会です。もちろん会衆はおもに学生でした。私はほかですと同じように説教しました。学生にはもし質問があれば、礼拝後、教会の後ろの建物へ行くとその機会が与えられると事前に知らされておりました。教区牧師と私は二、三人くらいの質問者だろうと予想して出かけたのですが、その場所はいっぱいになっていました。この牧師は着席して、何か質問があるかと尋ねました。すぐに、前の席に座っていた二人の快活な若者が立ち上がりました。後で分ったのですが、彼は法律を学んでいて、しかも将来、政治家や裁判官または弁護士、監督を志す者が公に話したり討論する技術を学ぶ場として有名なオックスフォード大学合同討論協会の首席役員でした。その彼が思いもかけないことを言ったのです。彼は立ち上がり、一つ質問したいと言いました。彼は合同討論者特有の、あらん限りの優雅さと洗練さをもつてその質問を続けました。彼は説教者をほめ、メッセージはとてすばらしく楽しいもの

だったが、心に一つ大きな困難と当惑が残ったと言っています。メッセージを喜んで聞くことができ、構成も良く上手に表現されていたが、農業労働者などのような会衆には同じように伝達されないのではないだろうか。彼はこう言って座りました。とたんに会場全体からどつと笑い声が起こりました。議長は答えを求めるように私のほうを向きました。そこで私は立ち上がり、そのような態度に対していつもするように答えました。つまり、あなたの質問はたいへん興味深い、実際私にはあなたが困難だと言うことの意味が理解できないと答えました。異論はあるだろうが、はばかり言わせてもらおうなら、私は語り出すその瞬間まで、オックスフォード大学の在学生や卒業生もほかの人と同じ土くれのあわれな罪人で、普通の一般的な人間として見ていた。また彼らの必要も農業労働者やほかの人々とまったく同じだと考え、私は自分の思った通りに説教した、と率直に述べました。するとこの発言でまた大きな笑いが沸き起り、喝采さえ飛び出したのです。しかし、大切な点は彼らが私の言うことを理解できたことです。そのとき以来、彼らはとても注意を払って私の語ることを聞いてくれました。その結果としてすでに先の章で言及したように、オックスフォード・ユニオンの有名なジョード博士との討論会へ招かれたわけです。特別なタイプの人々には別の福音が必要だと考えることほど大きな誤りはありません。それは聖書の明白な教えにまったく反しています。それはホイットフィールドやスポルジョンのような説教者の伝記やD・L・ムーディのような伝道者の話を読んだ場合と

も矛盾しています。彼らはこのような間違つた区別を決して認めませんでした。彼らの奉仕はあらゆるタイプ——知的にも社会的にも——の人々に祝福となつたのです。

第三にこの現代の観念は誤つた考え方に基ついています。これは私にとつてたいへん重要です。その考えというのは、現代人にとつての困難や問題また彼らが福音を信じるのを妨げているのは、すべてと言つていいほど言葉や用語に問題があるというものです。これは「コミュニケーションの問題」と言われ、今日大げさに取り上げられています。それがこの考えの背後に多く潜んでいるからです。

もう一度述べますが、できるだけ最良の翻訳文を追求すべきだということには私もまったく賛成です。私たちはこのことで反対論者になつてはいけません。翻訳者が与えうる最上のものを手にしましょう。しかし、このことと現代人に福音を「伝達」するには神を「なんじ」ではなく「あなた」とすべきだという考えの背後にある要点とは異なります。そこにある根本的な考えは、現代人が神を信じようとせず、神に祈らず、福音を受け入れない理由は欽定訳聖書の古風な言葉のせいなので、もしそれが正されるなら全般的に状況は変化し、現代人は聖書の教えを信じられるだろうということです。しかし、すべてこのような考えに対する答えは簡単です。人々はいつもこのような言葉に奇異を感じてきたのです。ポスト・クリスチャンの時代の人々は義認、聖化、栄化という語が理解できないという論議に答えるには、別の質問を試み

ることです。いつ人々はそれらを理解したでしょうか。いつ未信者がこれらの言葉を理解したことがあつたでしょうか。一度もなかつたのです。これが答えです。このような言葉は福音に特有であつて、特別なものです。ですから私たちの福音は本質的に異なつてゐること、私たちはありきたりの事柄を語つてゐるのではないことを示すのが説教者としての務めです。私たちは何か独特で特別なことを語つてゐるという事実を強調しなければなりません。そして人々がこの違いに期待を寄せるよう導かなければならないのです。ですからこの違いを主張するのが私たちの立場です。私たちの働きは人々にこれらの用語の意味を教えることです。何をどのようにに説教すべきかは人々が定めたり決定することではありません。神の啓示とその偉大なメッセージを預かるのは私たちであり、私たちがこれを理解させなければなりません。これがプロテスタントの宗教改革者たちのもたらした大原則です。だからこそ彼らは新しい訳の聖書を生み出したのです。彼らが記したように「人々に分つてもらふ」こと、これが宗教改革者の願ひでした。ラテン語を理解できない人の場合と、義認のように救ひに関する用語を理解できない人の場合とでは大きな相違があります。聖書や説教はその国の言語で伝えられるべきだといふ主張は常に正しいのです。しかし、救ひに関する特別な用語を理解するかどうかは別問題です。これは説教特有の働きです。私たちは人々がこれらの用語を理解できると期待すべきではありません。おおよそ説教する目的は、人々にこの理解を与えることです。「生まれな

がらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわかまえるものだからです」(Iコリント二・一四)。J・H・S・バーレイ教授が聖アウグスティヌスの哲学、特にアウグスティヌスの『神の国』をクローラ・レクチャーで語ったときの言葉に心を留めてみましょう。彼はアウグスティヌスを引用して次のように述べています。

もしもモーセが生きているなら、私は彼をつかまえ、これらの事柄を明らかにしてくれるよう懇願する。彼の口からほとばしり出る声にこの耳を傾けよう。しかし、もし彼がヘブル語で話すなら、彼の言葉は私の耳に響いても空しく、私の心にはまったく届かないだろう。たとえ彼がラテン語で話してくれても、私には彼の言葉が理解できようか。

バーレイ教授はさらに続けます。

ところで『教師について』の中でアウグスティヌスは、真理が一方の心から他方へ伝達される複雑な過程を分析している。話してそれを聞くという物理的過程のほかに霊的な過程も働いているに違いない。言葉は話されたものでも記述されたものでも、理解するには不可欠な

機械的助けであるが、理解する原因とはならない。それらは真理を表す記号である。しかし、心に真理そのものであるキリストという教師が住んでくださり、この方が内なる耳にそれらの言葉を語りかけてくれるとき、初めて理解されるのである。

理屈の上ではこれに同意する多くの人も、実践においてはこれを忘れていくようです。

さらにほかの間違った議論を取り上げます。私たちは人々に説教する前に、彼らの正確な状態を知らなければならぬ。工場で働く人々に効果的な説教をするには、六か月間でも工場で働くべきだという議論です。これは私にとって途方もなく愚かな議論です。というのは、もしこれがほんとうで、その結論を強調するならば、訓練には終りがなくなるでしょう。もし酒飲みに説教しようとするれば、酒場やバーなどで六か月間過さなければならず、あらゆる種類の商売、職業、部門を行き巡り、しかもそれぞれの場で六か月過さなければならぬのです。こうして初めて彼らに説教できるようになるというのです。まったく馬鹿げた考えです。そのような議論や仮定に基づいて種々雑多な人々からなる会衆に説教することは決してできません。

衆
知識人でない会衆のための礼拝、知識人のための礼拝と別々にもち、その中間に属するような人々にも別の礼拝が必要でしょう。さらに異なる年代の人々たちのための礼拝、工場労働者のための礼拝、専門職の人々たちのための礼拝と果てしなく続き、結果として自分の会衆を分割し、細

分化してしまふのです。それでは礼拝という一つの共通した公の行為をもち、一つのメッセージを受けるといふことがなくなつてしまいます。自分自身も分割され、その働きは際限のないものとなります。いずれにしても、私たちは一つであるという新約聖書の偉大で根本的な原則を破壊することになるでしょう。「ユダヤ人もギリシヤ人もなく、未開人もスクテヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。」私ならば知識人も無学な人もなく、工場労働者も知的職業人もなく、と加えるところです。私たちはみな等しく罪の中におり、敗北して希望のない者です。だれもが主イエス・キリストとその大いなる救いを必要としています。

自分のことになりますが、成人になつて医者として歩んでいたとき、医者働きと説教者の働きの相違についてよく関心を持ちました。もちろん多くの類似点がありますが、本質的相違があります。医者はどのように患者を扱うでしょうか。まず第一に患者に彼の病状や障害を説明するように求めます——痛みや苦しみがあるか、どのあたりか、どのくらい経過しているか、初めはどうだったか、その後変化があつたかなど。このことはかなり詳しく行われます。医者は注意深くその人の経歴を調べ、患者の子供時代からの病歴を調べます。それから家族の病歴も調べます。それが個々の病気に大きな光明を投げかけてくれるからです。遺伝的な病氣や家系的な病氣、すなわち病氣に対する家系的素因があるからです。ですから家族の病歴は非常に大切です。これらの諸事実を確かめてから、患者に対して内科的検査を進めます。

患者個人に関するこのような詳細で特別な知識がなければ、医者は働きを進められません。医者働きと説教者の働きに際立つた相違があるというのはこの点です。説教者には自分の会衆に関してこのような個人的事実を知る必要はありません。これは伝道集会などで個人的な証しをする場合について生じる論点です。個人の証しをたいへん重要視する人たちがいます。もし特別な弱さと罪の中にいた人が「キリストを受け入れた」ことにより、どのようにそれから解放されたか話すなら、聞く者には助けになるだろうと彼らは主張します。ここでも同じ議論が持ち出されています。しかし、説教者はこうした細かいことを知る必要はありません。なぜなら目の前にいる人々が一人残らず罪という同じ病氣で苦しんでいるのを知っているからです。病氣によって症状はかなり異なります。しかし、説教者の働きは症状に治療を施すのではなく、病氣そのものを処置するのです。ですから説教者は罪が表すところの特殊な形態にあまり関心を払つてはならないのです。

次も同じ要点で大切です。これは説教者が礼拝後に執務室で人々から相談を受けるときに生じます。相談に来る人はほとんど変わらず、自分たちの個々の罪について話そうとします。ある人は、もしこの問題を取り除くことさえできればすべてうまく行くと感じています。しかし、説教者が彼らを訓戒し矯正しなければならぬのは実にこの点です。つまりその罪を除き去しても、依然として彼らには同じ大きな必要があるのです。そこで救いはただ個々の問題を

取り除くことではなく、「全人」を神との正しい関係に置くことにあると彼らに示してあげなければならぬのです。

したがって説教者は人々について個々の詳細な事実を知る必要はありません。どの人にも共通する必要を知っているからです。全会衆に共通する事柄に限定して説教することが絶対必要です。自己満足しているパリサイ人に対しては、取税人以上と言わないまでも、彼の必要が非常に大きいことを知らせ、すぐれた理知主義者に対しては、自分の知識や理解力を誇るなら、それは知的傲慢の罪で、あらゆる罪の中で最大であり、多くの肉の罪よりさらに悪いものであることを示してやらなければなりません。説教者は自己を誇り、その学問や知識に信頼する者の高慢さをあばき出さなければなりません。また説教者は罪人ではなく、検察官か裁判官のように聴衆をメッセージを通してへりくだらせなければなりません。有罪の判決を受けて自分にはたいへんな必要があると彼らに悟らせるのです。こういうわけで説教者は社会の異なった分野や階級や部門に出かけて行く必要はありません。彼は工場で働く人の問題も知的職業の人の問題も知っています。というのも究極のところ同じ問題だからです。ビールで酔う人もいれば、ぶどう酒で酔う人もいます。しかし、大事なのは二人とも酔うことです。ポロをまとして罪を犯す人もいれば、夜会服を着て罪を犯す人もいます。要は両方とも罪を犯すことです。「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず」、「義人はいない。ひ

とりもない」のです。「すべての人が神の前で有罪だ」からです。

ですから説教に対する現代のアプローチはまったく誤った考えに基づいています。実際それは根本的に誤った神学のせいであり、そのため罪の本性を悟れないのです。つまり問題は個々の罪ではなく、罪そのものであり、罪が表すところの個々の形態や現象を分類するのは見当はずれで時間の浪費であることを悟れないのです。しかし幾世紀にもわたり、教会と説教の歴史はこの主張を実証しています。一般的な福音説教が聖霊の特別な働きによって個々の問題に適用されるのです。そして男性も女性も同じ共通した根本的必要を理解するようになり、同じ御霊によって回心し新生するのです。それで会衆は同じ一つの教会で混じり合っているのです。もし一つになれないと感じて交わることがないなら、その人たちは新生していないのです。新生しているなら当然そうなるはずですが。自分たちのすぐれた知性のために疎外されていると感じるなら、その人たちは根本的に謙遜さを欠いています。あるべき姿にまで謙遜にさせられていません。教会の栄光はさまざまタイプや種類の人々、それにありとあらゆる変化と多様性のある人々から成り立っていることです。しかも彼らはこの共通した生活を分かち合っているのです、一緒に参加し、同一の説教を享受できるのです。

以上が一般的な状況です。しかし、この点に関する一つの質問を私は想像できます。「それならコリント人への手紙第一、九章一九—二三節のみことはどういうことでしょうか。」その箇所はパウロが自分の働きについて述べているところです。

私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。ユダヤ人にはユダヤ人になりました。それはユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人々には、私自身は律法の下にはいませんが、律法の下にある者のようになりました。それは律法の下にある人々を獲得するためです。律法を持たない人々に対しては、——私は神の律法の外にある者ではなく、キリストの律法を守る者ですが、——律法を持たない者になりました。それは律法を持たない人々を獲得するためです。弱い人々には、弱い者になりました。弱い人々を獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。私はすべてのことを、福音のためにしています。それは、私も福音の恵みをとくに受ける者となるためなのです。

これは大いに関係ある聖句です。表面的に見ると、会衆席が講壇を支配すべきだとのめがけす今日の主張の多くを正当化する聖句のように思われます。一見、使徒は自分の行為は自分が

語る人々によって左右されると述べているかに思われます。

私たちは以上のみことをどう扱ったら良いのでしょうか。パウロはこの箇所、彼が実際に語る説教のことよりむしろ彼の通常の行動や振舞いのことをおもに述べているのは疑いありません。しかし同時に、彼がみことばの真理を提示する手段や方法も扱っているのは確かなので、私たちは幾つか結論を引き出すことができます。まず使徒の中の使徒であるパウロ——ほかの使徒もそうですが——には、相手によってメッセージの内容を変えるつもりはないことは明らかです。彼は提示する形式に関心を持っていただけです。それならこの提示の問題——現在の私たちの関心事ですが——をその箇所ではどう教えているのでしょうか。この趣旨にはつきりとした教えがあることは明らかです。すなわち説教者である私たちは柔軟性を持つべきだということ。提示の問題に関しても私たちは伝統主義者や形式主義者になつてはいけません。私たちの多くに現実その危険があります。古風な言い回しを使うのを喜ぶような説教者もいます。彼らは、そのような語句を使わない人がいれば、真に福音を語っているかどうか疑いをいだくのです。彼らは表現のとりこになっています。一例を挙げると、ピューリタンに新たな関心を持ちだした若い説教者たちが、まるで十七世紀に生きているかのような話し方や書き方を始めるのです。まったく馬鹿げています。彼らは当時一般的に用いられた言い回しを用い、さらにピューリタンの特徴だったと思われる歩き方や服装さえもまねようとします。しか

し、それはもう今日のクリスチャンの特徴ではありません。要するにある種の風俗を模倣しているだけです。このようなことはまったく誤りです。

私たちは信仰の付随的な事柄や一時的で過ぎ去ってしまう面に関心を払うべきではありません。むしろ永続的な原則や事柄に関心を持つべきです。これこそパウロが述べたかったことです。彼はこのような問題でかなり苦闘しなければなりません。コリント人へあてた第一の手紙八章で偶像に供えた肉の問題を扱い、ローマ人へあてた手紙の一四章でもそのことを扱っています。人々は回心前のさまざまな伝統に拘束されていたので、これらの問題ではほとんど困りはてていたのです。ユダヤ人クリスチャンは異邦人クリスチャンのある人々と同じように、偶像に供えられた肉やそのほかの事柄で困惑していました。これに対してパウロが繰り返し述べていることは、本質的な事柄は固守しなければならないが、本質的でない事柄については柔軟であるべきだということです。彼がこのことを主張するのは「弱い兄弟」のことを気遣っているからです。そのような兄弟の弱い良心を踏みこじめるべきではなく、むしろあなたがたは彼の助けとなるべきで、たとえあなたのことと自身体理になっても、もし兄弟をつまづかせるなら、そのことを止めるべきだということです。「ですから、もし食物が私の兄弟をつまづかせるなら、私は今後いっさい肉を食べません。それは、私の兄弟につまづきを与えないためです」とパウロは言うのです。「私が良心と言うのは、あなたの良心ではなく、ほかの人

の良心です」と続けています。しかし、彼が非常に明瞭に語っていることは、会衆とメッセージとの間にどんな先入観も持ち込んではならないということです。あなたは自分を支配するどんな小さな弱点もはいり込ませてはいけません。あなたは弱さを持つ人々に説教し、彼らが見ことばの真理を知るようになるため精一杯助けてやらなければなりません。また異邦人に對しては、あるユダヤ人クリスチャンが彼らに主張するような事柄を強要してはならないのです。彼らの主張は間違っています。あなたは、実にこの問題でパウロがアンテオケで「ペテロに面と向かつて抗議」しなければならなかったことを思い起すでしょう。ペテロはこうした問題で混乱していたので、パウロは公然と彼を正さなければならなかったのです。そのことをパウロはガラテヤ人への手紙二章で私たちに語っていますが、ここで彼が扱っていることと本質的に同じ原則です。

さて以上のことを現代風な言葉で言うなら、私たちの働きは常に同時代的であるべきだということなのです。私たちの目的は目の前で私たちが語るのを聞いている人々を取り扱うことです。三百年前のピューリタンの説教者とか百年前の説教者の理想像を心に描いて講壇に立ち、あなたも自分がその場に居合わせているかのように振舞ってははいけません。そんなことをすれば害を及ぼし、現代の会衆にはつまずきとなり、彼らが説教に耳を傾けるのをますます困難にしましょう。いずれにしてもそれはまったくメッセージの本質的部分ではありません。私は過去

の説教者から学ぶことができますし、それはすべきことです。しかし、彼らを無批判に模倣してはいけません。みことばの真理に関する彼らの知識と解説に私は助けられますが、その説教に付随する事柄——過ぎ去る一時的な当時の習慣や流行に関する事柄——にまで固執したり、それらを見ことばの真理と同じほど必要なものと見なしてはならないのです。それを模倣することは「真理を支える」のではなく、伝統主義です。もちろんこれは説教の形式ばかりではなく、礼拝形式や服装そのほか多くの事柄に適用されます。

確かにパウロは、実際私たちの提示方法には柔軟性がなければならぬと主張しています。しかし、この原則にも明らかに制約があります。私たちは古風な形式主義に陥ってはなりません。幾つか制約があります。その原則の一つとして「目的は手段を正当化しない」ことが挙げられます。これは今日よく議論となる点です。その論点は「しかし、この方法でも結果的には人々は回心している」というのです。でも私たちはそのような詭弁的な主張を受け入れてはなりません。それに対する正当な理由もあります。

第二に福音の提示方法はメッセージと常に首尾一貫していることです。つまり矛盾がないことです。現在このことはとても大切です。たいへん真面目で、純真かつ素直で、動機も実に立派で人々を救いに導くことに関心を持っている人たちがいます。ところが彼らからこの一貫性が失われ、人々と触れ合い、メッセージを信じやすいものになりたいと願うあまり、しばしば彼

らはメッセージと矛盾するものを行ってしまうのです。ですから提示方法がメッセージと矛盾するならば、その方法は悪いものです。私たちは柔軟性を持ちましょう。しかし、自分のメッセージと矛盾しない程度にです。

以上の矛盾は聖書的な諸原則に関してだけでなく、実際面でも事実であることが証明されます。私がいつも驚かされるのは現代的な提示方法に非常に関心を持っている人々が、情緒的・心理的に無知であることです。彼らが人間性を知っているとはとても思われません。実のところこの世は私たちが違った者であることを期待しているのです。ですから自分たちも世の人たちと同じで、ほとんど違いがなく、あってもほんの少しだけだということを示すことができれば、世の人々を獲得できるだろうという考えについては、神学的ばかりでなく、心理学的にも間違いないのです。

よく知られた例を用いてこの点を述べましょう。第一次世界大戦の終り頃、イギリスに「ウッドバイン・ウィーリー」という名で知られた有名な牧師がいました。なぜ「ウッドバイン・ウィーリー」などと呼ばれたのでしょうか。実は彼は従軍牧師で、その働きで大いに成功を収めました。彼は自分が成功したのはざんごうの中にいる人たちと同じようにつき合った——多くの人がそれを認めています——からだというのです。彼は兵士たちと一緒にタバコを吸ったのですが、特に「ワイルド・ウッドバイン」、通称「ウッドバイン」という安い銘柄のタバコ

を吸いました。ちなみにこれは一九一四年以前には、一ペニーで五箱も買うことができませんでした。こんな安いタバコは、一般に士官は吸わないで普通の兵士が吸いました。そこでスタダード・ケネディというこの従軍牧師は兵士たちを安心させて、チャプレンとしての仕事をやりやすくするため、「ウッドバイン」を吸ったのです。それで彼に「ウッドバイン・ウィーラー」の名が付けられたのです。それだけではありません。大多数の兵士は下品な言葉でしか話せないのを見た彼は、彼らと同じ言葉づかいをしたのです。それは彼が下品な言葉を使ったからではなく、もし人々を獲得しようと思うなら、彼らの言葉を使い、すべての点で彼らと同じになる必要があるという考えを持っていたからです。こんな調子で確かに彼は人気者になりました。それについては疑いありません。第二次大戦後、彼は地方を回ってこのことを教え、説教者はこのようにしなければならぬと説きました。それで多くの人々がそれに賛同し、実際始めたのです。しかし、これに関する歴史的判定はまったくの失敗と出ました。一時的な「妙技」や「技巧」は、しばらくは評判を得ても間もなく教会の考え方から跡形もなく消えてしまったのです。しかし、一時はかなり人気を博したのです。

新約聖書の見地からもこれはまったく誤った考えに基づくものでした。主が罪人をご自身のもとに引き寄せたのは、主がほかの人と違っていたからです。彼らが主に近づいたのは、主には何か違ったものがあると感じたからです。ルカの福音書七章を読むなら、罪深い女性はパリ

サイ人に近づいて彼らの足を洗い、彼女の髪の毛でそれを拭いたのではありません。決してそうではありません。彼女は主のうちに何か——主の清浄さ、聖さ、そして愛——を感知したので主に近づいたのです。彼女を引き寄せたのは主が本質的に違っていたからです。この世はいつも私たちに違っていることを期待しています。ですから自分たちも、結局ほかの人々と同じであることを示して、人々をキリスト教信仰へと導こうとする考えは、神学的にも心理学的にも大きな誤りです。

この原則は現代にも広く適用されます。ローマ・カトリックの人々を主に導くには、彼らに對して互いの間に実際の相違は何もないことを示すことだ、と考える愚かなプロテスタントの人々がいます。一方、プロテスタントに改宗したカトリックの信者は、心動かされたのはその相違であったと言うのです。「作用と反作用は等しく相対立する」とあるように、現代のこういう考えは神学的にも心理学的にも間違ったものです。

こういうわけで必然的な違いが生じるのは私たちの扱う主題がたいへん違っているからです。この領域で私たちは神について扱っています。すなわち神に関する知識、そして神との關係を扱います。それですべてのことは「神の支配下」にあり、「慎みと恐れとをもつて」行われるべきです。私たちが事を決めるのはありません。責任を持ち管理するのは私たちではなく神です。それはあくまでも神のみわざであり、「私たちの神は焼き尽くす火である

に良いことでも他方の集団には良くないと断定し、しまいには福音さえも否定してしまう罪を犯すのです。「ユダヤ人と異邦人、未開人、スクテヤ人、奴隸と自由人というような区別はありません。」これこそただ一つの福音であり、唯一のものであります。これは全世界、全社会のためにあるのです。人類は一つです。私たちは現代の心理学的理論を採用するという重大な過ちに陥り、真理をうやむやにさえます。ときにはメッセージから自己防御したり、伝える特権を賦与されているメッセージとは調和も一致もしない方法をしばしば正当化しようとするのです。

メッセージの特徴

会衆席と講壇すなわち聴衆と説教者との関係という問題はもつとも重要であります。この趣旨に關してはすでにコリント人への手紙第一、九章で使徒の教えを考察したので、その結論を述べましょう。

それは会衆席は決して講壇を指図し支配してはならないことです。これは自明の理だと私は断言します。しかもこのことは現在、特に強調される必要があります。

しかし、同時に強調したいのは説教者も会衆席の人々の状態を評価し、メッセージの準備や語るときにそれに留意しなければならないことです。ただ注意してほしいのは、聴衆が説教者を支配するのではなく、説教者が聴衆の状態を評価すべきだということです。それでこの主張の聖書の根拠を挙げますが、数か所あるので、より明確なことを幾つか取り上げます。たとえばパウロはコリント人への手紙第一、三章の初めで、「さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かつて、御霊に属する人に対するようには話すことができないで、肉に属する人、キ

リストにある幼子に対するように話しました。私はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。あなたがたは、まだ肉に属しているからです」と言っています。明らかに彼がそこで語っていることは、彼はコリントの人々の状態に応じて行動したということです。彼らがパウロを指図したのではなく、パウロが彼らの状態を評価し、それが彼らに対する彼の説教をある程度決定したのです。

次に二番目の例を見ましょう。それはヘブル人への手紙五章一一節以下にあります。著者は「メルキゼデクの位に等しい大祭司」である主に言及し、さらに次のように述べます。

この方について、私たちは話すべきことをたくさん持っていますが、あなたがたの耳が鈍くなっているため、説き明かすことが困難です。あなたがたは年数からすれば教師になつていなければならぬにもかかわらず、神のことばの初歩をもう一度だれかに教えてもらう必要があるのです。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要とするようになっていきます。まだ乳ばかり飲んでいるような者はみな、義の教えに通じてはいません。幼子なのです。しかし、堅い食物はおとなの物であつて、経験によつて良い物と悪い物を見分ける感覚を訓練された人たちの物です。

ここでもまったく同じことが見られます。彼は偉大な大祭司としての主に関する教理を読者に教えたいのですが、彼らがまだそれを受け止められる状態にないと評価されるので、無理だと感じているのです。

もちろんこれは教育に関しては基本的な点です。どの領域であつても、教師がまず最初に行なければならぬことは、聴衆であれ生徒や学生であれ、彼らの能力を評価することです。この根本原則は絶えず説教者の心になければならず、私たちは絶えずこのことを思い起す必要があります。説教者が若ければ特にそうです。若い説教者が犯すおもな過ちは、人々が今どんな状態にあるのかということより、人々にどうあつてほしいかという基準で人々に語ることです。しかし、これは多かれ少なかれ避けられないことです。ピューリタンの偉大な説教者の伝記を読んで、その結果、説教者はいかにあるべきかという一つの理想像を描くようになり、その通り実行しようとしています。ところがピューリタンの説教——ときには一回に三時間にも及んだ——を聞いた会衆は、多かれ少なかれ、一世紀にわたつていろいろと訓練を受けた人たちです。本題からそれるようですが、ピューリタンのおもな作品は十七世紀中頃に書かれ、私たちも容易に入手できます。しかし、それはすでに清教主義が約百年で確立された時期であること人々はしばしば忘れていきます。つまり聴衆は訓練と教育を受けて備へがあつたので、あのようないメッセージの緻密な理論と論法について行けたのです。しかし、もし今日の若い説教

者がこの点を理解しないので、ピューリタンのように二時間も説教しようものなら、会衆は一人残らずいなくなるでしょう。ですから説教者が自分の会衆を評価することはとても重要です。

馬鹿げているようですが、最近起きた実例を挙げます。ロンドンのある教会で婦人会が毎週開かれていました。それは教会の婦人たちのためではなく、その地域の比較的貧しい婦人たちのための集いでした。この集いは何年間もよく用いられ、おもに伝道的な性格を帯びていて、毎週違う説教者が招かれていました。聴衆の大部分は貧しい老婦人たちで、若い婦人たちは家事に忙しかったり、働きに出ていて平均年齢はだんだん高くなっていました。でもこの集いには毎週四、五十名が集っていたのです。説教者を見つけるのが次第に大きな問題となったのですが、多くの方は喜んで手伝ってくれました。ところがある週のこと、その教会の会員で知的職業に従事している若い人が彼女たちに語るために立てられました。しかし、なんと彼はその老婦人たちに向かって「三位一体」を語ったのです。私があえてこの話をするのはそのような行為が馬鹿げていることを示すためです。男性で知性があり、しかも訓練された知的職業人なので人々に語るべきものを持っていると考えたのかも知れません。しかし、明らかに彼は三位一体について考えたこともなく、おそらく最近それに関する記事か本を読んだのでしょう。しかし、彼の行ったことはまったく無益でした。「幼子には堅い食物」ではなく、乳を与えなければなりません。それはパウロやヘブル人への手紙が教えている原則です。

しかし、以上の事柄に付け加えることがあります。自分の会衆を評価することは説教者の義務であり働きですが、その評価は真実で正確であるよう注意しなければなりません。これは強調するまでもないことです。しかし、危険は講壇と会衆席の双方から生じます。講壇は会衆席を誤って評価し、会衆席は自らを誤って評価するのです。私はこの両者に誤りが目立って多くあり、それが私たちに現在ののような立場をもたらしたおもな原因であり、それを説明する事柄の一つだと感じるのであります。

この評価に関して講壇が直面するおもな危険は、自分をクリスチャンだと主張し考える人々や教会員であれば必然的にクリスチャンだと考えてしまうことです。これはもともと致命的な間違いですが、もともと共通して見られます。教会員であればクリスチャンだと考えるのは次のような理由から危険で間違っています。あなたはどの礼拝でもクリスチャンである信者に向けた説教をする傾向になるでしょう。それにメッセージはいつも教育的なものとなって、伝道的要素や特徴がほとんど全面的に無視されてしまうでしょう。

これはとても重大で嘆かわしい誤りです。理由を幾つか挙げますが、まず私の個人的な体験から始めましょう。私は何年間も自分をクリスチャンだと思っていました。しかし、実際は違っていたのです。自分がクリスチャンではないと分り、クリスチャンになったのは後になってからです。それでも、私は教会の一員としてきちんと教会に出かけて礼拝を守っていました。

ですからほとんどの説教者と同じく、だれもが私をクリスチャンだと考えていたのです。でもこれは私の状態に対する正しい評価ではなかったのです。私に必要だったのは私に罪を自覚させ、私の必要を知らせ、私を真の悔い改めに導き、そして新生とは何かを知らせてくれる説教でした。でも私はそれを聞いたことがなかったのです。語られた説教はいつも私たちは皆クリスチャンであって、そうでなければこの会衆の中にいるはずはないという想定に基づくものでした。これは、特に今世紀の教会がよく犯す誤りの一つだと私は考えます。

しかし、私は説教者また牧師としての経験から何度もこの点を強調してきました。教会員になりたくて希望して私の執務室へ相談に来た人々と話すのですが、もつとも共通して尋ねた質問は、あなたはなぜ教会員になりたいのか、どんな体験をしてきたかなどです。特にロンドンで三十年以上にわたり私が受けたもつとも共通した応答は次のようなことです。これらの人々——ほとんどが大学生や若い卒業生でしたが——は自分はクリスチャンだとほんとうに信じて、母教会からロンドンの大学に来たと言います。しかもクリスチャンであることにまったく疑いを持たず、ロンドンに来る前には日曜日などの教会へ出席すべきかを母教会に聞き、母教会が私たちのことを学生たちに教えたのです。さらに彼らが私に語ってくれたことは、この教会に来て説教を聞くようになり、特に日曜日の夜はすでに述べたように必ず伝道を目的とした礼拝でしたが、自分たちはほんとうはクリスチャンではなく、誤った仮定のもとで生きていたこと

を発見したというのです。最初、彼らの幾人かは正直にこのことを告白したものの、そのことで悩みました。受け入れられず憤慨さえしました。しかし、確かにその通りだと悟り、来続けたのです。こんなことが何か月も続くうちに、彼らは魂の大きな苦悩の中で悔い改めるときを経験したのです。それまで自分たちはクリスチャンだと思い込んでいたので、彼らは信じるという言葉に恐れを感じるようになっていました。同じ間違いを繰り返すのを恐れたからです。しかしついに彼らははっきりと真理を知るようになり、その御力を体験して真にクリスチャンとなりました。以上が私の働きでもつとも共通した体験です。定期的に礼拝に来るならその人はクリスチャンに違いないと思いつむのは実に危険な誤りであることをそれは示しています。

もつと顕著な話を述べましょう。この話をするのも極めて重要な点を知ってほしいからです。一九三二年、私はカナダのトロントで九週間にわたり日曜日に説教しました。これは私にとって喜びであり特権でした。その教会の牧師は休暇中にもかかわらず、町を離れないで、最初の日曜日の朝はわざわざ私を迎えてくれました。彼は私を紹介してくれたので、私はその歓迎に応えながら、会衆の人々に説教者としての自分のやり方を簡単に述べておくのは賢明ではないかと考えました。それで一般的に日曜日の朝は信者や聖徒たち向けに、彼らのクリスチャンとしての品性を高めるのをねらいとして語るが、夜はたぶん未信者の人が多いと思われるので、彼らに向けた説教をしたい、と会衆に告げました。ついでにそのことに触れたのです。

さて、午前の礼拝を終えると牧師が、一緒に入口に立って帰って行く人々と握手をしてもらえるかどうか私に尋ねたので、私はそれを引き受けました。私たちは大勢の人々と握手を交わしました。突然、彼は私に言いました。「ゆっくりとこちらにやって来るあの老婦人がお分りでしょう。彼女はこの教会でもっとも重要な会員です。たいへん裕福な女性で、教会の働きの最大の支持者です。」要するに彼は私の持つ魅力を最大限に發揮してもらいたかったのです。それ以上の説明は不要でしょう。ともあれ、その老婦人がやって来たので私たちは彼女に声をかけました。しかし、そのときのことを私は決して忘れることができません。忘れられない大きな教訓を私に教えてくれたからです。その婦人は言いました。「夕方にはクリスチャンでない会衆を想定して説教され、午前はクリスチャンの会衆のために説教されるのですね。」私は「その通りです」と答えました。すると彼女は「それなら私は今夜来ることにします」と言ったのです。彼女がこれまで夕拝に出席したことなど知っている人はだれ一人なく、彼女は午前にはしか出席しませんでした。ですから「私は今夜来ます」と彼女が言ったときの私の当惑と言ったらどう語ったらいいか分りません。自分のそばに立っている牧師はきっと私が彼の働きを壊してしまったと感じ、説教のために私を招いたことを痛く後悔しているのではないかと私は思いました。しかし事実、彼女はその日曜日の夜にやって来たのです。私がそこに滞在している間、彼女は毎週日曜日の夜出席しました。さらに私は彼女の家で個人的に会って話をするこ

とができましたが、彼女は自分の霊的狀態をたいへん悲しんでいました。自分がどのような場にいるのか分らなかつたのです。彼女は洗練され、とても寛大な性格で模範的な生活をしていたので、だれもが——牧師だけでなくほかの人々も——彼女はまれに見るすばらしいクリスチャンだと思っていたのです。しかし、彼女はクリスチャンではなかつたのです。こういうわけで教会員であつて規則的に教会に出席しているならクリスチャンに違いないと考えるのはもつとも致命的な誤信の一つです。私はこれがおもに今日の教会の狀態を説明していることではないかと思うのです。ですから私たちはこの点によく注意しなければなりません。

ところで聴衆にも同じことが適用されます。同じ誤つた考えを聴衆が持つことがあるからです。自分たちはクリスチャンだと思ひ込んでいる人々は、そうではないと思わせる説教には憤慨します。しかし、それに気づくことこそ彼らにとって何より必要なのです。もう一つの話を用いてこの点を例証しましょう。それは一人の婦人のことです。彼女は一年間ほど新任牧師の説教を聞いて、教会を離れてしまいました。彼女はその理由を挙げ、「牧師はあたかも私たちが罪人であるかのように説教するのです」と言いました。何ということでしょうか。それで彼女は不快にさせられ、自己点検させられ、自分のほんとうの姿を見つめさせられたのでいやになつたというのです。彼女はその教会に三十年近く出席していたのですが、実際みことばの真理に直接的、個人的に直面させられたので反発を感じたそうです。彼女は信者向けの普通の聖

書講解やメッセージを好みました。それは彼女を傷つけることがなく、困惑させ心を探るといふこともなく、罪を深く感じさせることもなかったからです。要するに説教は大いに楽しんだが、それが個人的、直接的になるといやになつたというわけです。

このような態度は実によく起ることです。それで会衆の状態を評価するというこの問題において、以上のことは私たちが注意を払わなければならない点です。私はロンドンにある福音的クリスチャンの団体のかなり著名な指導者の方から一度手紙をもらったことがあります。名前はよく知っていました。一度も会つたことはなかったのです。手紙を開きながら、私はその名前に気づきました。彼は先週の日曜日の夜、私たちの教会の集会に出席して、奇妙な発見をしたのです。自分のような年齢と地位の信者が、明らかに伝道的な礼拝から恵みを受けるといふのはありえないことで、日曜日の夜に自分のような信者が出かけるのは、せいぜい回心してない人たちのことを祈るためくらいで、すでに回心の経験を経た自分がその集会から恵みを受けるなんて期待できないと考えていたのです。ところが驚いたことに、彼はその礼拝で心動かされ、捉えられました。つまり何か彼に働き、何か与えられたのです。それまでそんなことはありえないと考えていたのに、彼は生れて初めてこの発見をしたので、私に手紙を書いて知らせなくてはと感じたそうです。

明らかにこれは重大な問題です。なぜなら、説教者とその働きに大きな影響を与える事柄だ

からです。ところでこうした誤つた仮定をどう説明したら良いのでしょうか。それは多くの人が自分たちをクリスチャンだと考えて聖書の教えを知的に受け入れてきたが、みことばの力を経験していないという事実から生じていると思われまゝ。彼らはみことばの力を経験したことがなく、純粹に知的な教えを受け入れていたのです。実際にその御力を受けていないので、真に悔い改めた経験もないのです。罪に対するある種の悲しみを知っているかも知れませんが、それは悔い改めとは異なります。以上がしばしば会衆の状態を説明してくれる事柄です。真の信者は常にみことばの力を感じ、それによって罪の自覚をさせられます。信仰とは、ある意味で一度限りのことですが、別の意味でそうではありません。クリスチャンだと自称していても、福音のメッセージを聞いても改めて罪に自覚を生じることがなく、自己の無価値さも感じず、福音による救いが示されても喜びを感じないなら、その人は本質的にどこか間違っています。しかし、これらのことが私に手紙を書いてきた人には起きたのです。彼の心はその頭脳や、受けた教えよりずっと健全でした。

もしそのようなメッセージを心動かされることなく、感動せずに聞くとしたら、私はその人がほんとうにクリスチャンかどうか尋ねてみたいと思います。真の信者であるなら、次の二つの面から感動を受けずに聞けるというのは、私には想像できません。一つは疫病のような自分の心の病を知っているので、自分はクリスチャンでないかも知れないと感じることです。そし

てもう一つは自分を解放してくれる栄光ある福音の救いを喜ぶことです。これまで何度となく礼拝後、男女を問わず私のところに来ては、次のように話すのを聞きました。「もし私がこれまで回心していなかったとしたら、今夜私は確かに回心しました。」私はいつもそのことを喜びをもって聞きます。それは彼らがもう一度福音の力を感じ、完全なものを見て、いわば、もう一度回心を体験したことを意味するからです。自分をクリスチャンだと主張する人が、どんな形式で提示されるにせよ、いつでもこの栄光ある福音の力の影響を受けないならば、根本的に必ずどこか間違っています。

換言すれば説教者として私たちは、「この人たちはクリスチャンですから……」と言って、人々を固定的に分類をする過ちを犯さないよう注意しなければなりません。人々をクリスチャンだと言うときには、あなたはしっかりと確信を持っていなければなりません。多くの人の傾向として、「私たちは伝道集会で決心した結果、確かにクリスチャンになりました。クリスチャンとして、私たちに必要なことは教育と薫陶です」と言います。しかし、声を高くして強調しますが、どの教会でも毎週一回、伝道礼拝を持つべきです。ためらわず私はこれを絶対的規則と定めたいのです。私はそれを実行しています。なぜなら今日、こうした混乱があらゆる所の教会で問題となっているからです。

何年も前に一人の老人の方から言われたことをいつも思い出します。私たちは霊的状態の悲

しむべき衰微について、特にウェールズの諸教会の霊的状态について論じ合っていました。そのとき私たちは、特に十八世紀の福音的な覚醒の結果として生れた長老派教会——カルヴァン主義のメソジスト教会——に関心を寄せていました。私はその時期の偉大で光栄ある歴史を読んでいたのです。彼に尋ねました。「この教派の初期の歴史や最初の百年について読んだこと、今私たちが知っている状況との違いはいつ生じたのですか。」彼は「率直に言って、それは一八五九年のリバイバルの後に起きたのです」と答えました。「しかし、それはどのようにしてですか」と尋ねると、彼は「それは次のようにして起きました。そのリバイバルは非常に力あるものだったので、多かれ少なかれ、だれもが教会にかき集められました。それ以前は『教会』と『世』との区別がありました。教会員になるための承認審査はとても厳しく、その結果一八五九年以前では、聴衆や信奉者にすぎない大勢の人が公同の礼拝と説教の場に出席していても、教会員ではなかったのです」と答えました。

この発言はたいへん興味深く、重要な点です。今日の教会でこのことが何とわずかしか見られないことでしょう。前世紀の中頃まで大部分の非監督教会では、会員と同じようにいつも聴衆や信奉者がいましたが、変化は一部、リバイバルでの聖霊の偉大な働きの結果起きたのです。つまり教会員の洗礼を受けた子供たちをクリスチャンと見なす傾向が増大したのです。その結果、説教者はすべての聴衆をクリスチャンと見なし、伝道説教をやめるようになり、ときには

全然しなくなったのです。だれもがクリスチャンだと考えられ、働きはもっぱら薫陶に力が注がれ、その結果福音の力を知らず、罪の自覚を与えられる説教を聞いたことのない世代が生れてきたのです。前にも言いましたが、私も個人的にはその世代に属する者です。一八五九年のリバイバル後の二代目の世代に属し、真に罪を自覚させる伝道的なメッセージを聞いたことがなかったと後で分りました。私は定められた種々の質問に正しく答えられたので教会に受け入れられたのですが、試されるといふ意味で質問され、調べられることはありませんでした。しかし、教会に来ているのでクリスチャンだと考えたり、クリスチャンの子供たちを当然クリスチャンだと見る傾向をあまり強く非難することはできません。というのもも見方を変えたと、説教者の生活の中でもっとも気持ちを引き立たされる経験の一つは、だれもがクリスチャンだと思っていた人が、突然回心して真のクリスチャンになったようなときに生じるからです。大勢の人にこのようなことが起きること以上に教会の生命に力強い影響を与えるものはありません。要するに私が主張するのは、教会に出席するすべての人は福音の力に屈服させられるべきだということ。福音は知性のためだけにあるものではありません。もし私たちの説教がいつも講解的で薫陶と教育のためなら、固くて冷淡で、しばしば思いやりのない自己満足的な教会員を生み出すでしょう。パリサイ的会衆を生み出すのにこれ以上のことを私は知りません。この誤った態度のさらに大きな結果としては、人々が毎週一回、日曜日の礼拝に出席するだけで充

分とし、それ以上は必要としなくなったことです。日曜日の朝だけ出席する、いわゆる「一回きりの出席者」になるのです。

これは実に嘆かわしいことです。そこで第一の要点として、講壇と会衆席両者のこの誤った評価に対してはその原因をはっきり追及すべきことです。両者の診断は一致して彼らをクリスチャンだと見ていますが、彼らは自分たちがほんとうにクリスチャンだと確信させられる説教を聞いたことがないので、それを正す方法は、すでに述べたように週に一度は必ず聖書的な意味で明らかに伝道的礼拝を持つことです。

もちろんこの趣旨は聴衆にはつきり説明しておくべきです。それをするのも私たちの説教の一部です。なぜなら間違った想定に基づいて行動している聴衆の多くは、それを聞く必要も、そこから得るものもないと感じて伝道的な礼拝に来ようとしなからずです。

これは私には今日の教会が抱える問題のまさに本質そのものです。そのような人々に何を言うべきでしょうか。まず私たちは教会のどの礼拝にも出席することの重要性を彼らに自覚させなければなりません。どの礼拝にも！なぜでしょうか。最初の答えとして——これは私がよく用いてきた論点で、人々も理解してくれました——もしすべての礼拝に出席しないなら何か驚くような事柄が起きて自分はその場に居合わせていないという事態になるからです。

以上のことは説教とは何かという問いを再び提起します。というのも説教の本質である御霊

の力についても一度言及しているからです。しかし、それは後の講義でもっと深く展開させるつもりです。ただ教会の礼拝に関連して、そこで何が起きるか分らないという観念を取り戻すことは非常に大切です。もし説教者がいつも何が起きるか正確に知っているなら、私の考えでは講壇に立つべきではありません。説教の働きは光栄は何が起きるかあなたに分らないところにあるからです。講義では何が起きるか分ります。自分がそれを支配しているからです。しかし、説教の場合はそうではありません。突然、思いがけないときにほかの要素——御霊の力が触れること——が礼拝に介入するのです。それは個人や集団に起きるもつとも光栄ある事柄です。ですからもしあなたが「一回きりの出席者」で、すべての礼拝に出席しないなら、あなたが欠席した日曜日の朝か夜の礼拝で起きた驚くような出来事をほかの人たちから聞かされることになるかも知れません。あなたはそこにおらずそれを見そなたです。ですから私たちは人々のうちにこのことを期待する心を創造し、また「主の御前から回復の時が来る」(使徒三・二〇)すばらしい機会を逃す危険があることを彼らに示してあげるべきです。

ところで次のような質問が当然起るでしょう。なぜどのクリスチャンも可能な限りそのことを切望しようとしなのか。確かに不自然です。聖書的でもありません。詩篇記者が八四篇で言っているのを見てください。そこでは記者がほかの人たちと共に主の家に上ることができないので、その不幸と悲しみを表しています。「万軍の主。あなたのお住まいはなんと、

慕わしいことでしょう。私のたましいは、主の大庭を恋慕って絶え入るばかりです。私の心も、身も、生ける神に喜びの歌を歌います。」さらに記者はその特権を持つ人々のことを考えています。「なんと幸いなことでしょう。あなたの家に住む人たちは。彼らは、いつも、あなたをほめたたえています。」詩篇の記者は自分が彼らと共にいけないので、羨望をもって彼らのことを考えているのです。どんなことも神の家にはいることと比べることはできません。「あなたの大庭にいる一日は千日にまさります」とある通りです。確かにこれは、真のクリスチャンであるなら本能的なことです。クリスチャンだと主張しても、教会の働きから得られるすべてを自分のものにしてしまうとしない人には、霊的に重大な誤りがあるのです。

同じ主題を別の面から取り上げましょう。多くの国の人から聞いたことですが、会衆が説教者に対してメッセージの長さを指図する傾向があるそうです。説教の奉仕である教会に到着したところ、礼拝式の順序を書いた紙が手渡され、それにはすべてのことが事細かにしかも時間まで記されていたと多くの若い説教者から聞きました。「十一時、招詞。十二時、祝禱」とあって、一、二か所で聖書朗読、数回の祈り、三、四曲の賛美歌、子供のためのお話、聖歌または独唱、報告、献金とあり、当然のことながらメッセージの時間は短くならざるをえません。

なぜそのようなことになるのでしょうか。彼らに重大な過ちはないのでしょうか。ところが演劇やテレビ番組に対する彼らの態度はこれとは違います。早く終ってしまうことが問題なの

です。フットボールの試合とか野球の試合とか、関心のあるものなら何でも同じです——つまりあまり早く終ってしまうのが残念だ。いったいこの違いは何なのでしょう。非常に深刻な問いです。そうしたほかの領域では、人々はそれを楽しんで、好きなので時間が長びくことなど反対しません。むしろ長いほうを願います。なぜクリスチャンにとって礼拝がそうではないのでしょうか。今私は、毎週礼拝に出席しているならその人たちはクリスチャンだと思ひ込む問題をもう一度提起します。もし彼らがメッセージにこうした制限を設けるなら、多かれ少なかれ、自分たちはクリスチャンではないことを告白しているのであって、霊的な生活に欠けているのです。なぜ彼らは説教が行われているとき、しばしば気のない態度をとるのでしょうか。彼らはよく自分たちは聞いてやっているのだ、しかも短いことを条件に、という印象を説教者に与えます。ときにはメッセージを耐え忍ぼうと身体を沈ませてしまう人さえいるのです。

ウェストミンスター・チャペルの私の前任者の一人で、前に言及したジョン・A・ハットンのことを思い出します。彼はこのことに関連して、たいへん面白い話をよくしていました。彼も私と同じように、会衆と聴衆との性格を実際に決定するのは講壇であり、よい聴衆はよい説教によって生れると考えていました。そこで彼は次の話をしました。ある教会で彼が説教したときのことです。彼が聖書から語り始めたとき、会堂のずつと後ろの角に座っていた一人の男性がその角に身を沈め、座席の上に両足を載せていました——明らかに眠るために身を落とす

ていたのです。このジョン・ハットンはそのようなことを見逃す人ではありません。彼はその人に向かって言いました。「そこのお方。私はあなたを知りませんが、たとえあなたがだれであっても、公平な方だとは思われませんね。」彼はさらに続けて「もしメッセージの終りに眠るならば、悪いのは私です。でもあなたは私に機会を与えず、私が聖書の箇所を伝えているときにもう眠る体勢をとるようでは、公平ではありません」と言ったのです。

会衆の中にいる教会員の多くがそのような気分や態度で礼拝にやって来るのは疑いない事実です。私は病気で静養したこの一年間、会衆の後ろに座っていて、次のような結論に達しました。多くの人が礼拝や奉仕に出てくるのは家に戻るためではないかと。彼らがつばら考えているのは出かけてまた戻ることです。それならなぜ出かけてくるのでしょうか。これこそ問われる必要があります。なぜこれほどまで礼拝を、特にメッセージが終るのを気にするのでしょうか。出てくる結論はただ一つです。このような人々は謙遜にさせられる必要があります。彼らには霊的な事柄、すなわち霊的な心やもの見方それに理解力が欠けているのです。

これは単なる見解の相違という問題ではありません。私は使徒の働き二章で初代のクリスチャンについて語られている事柄と比較した上で述べています。それは確かに私たちすべてにありべき基準です。次のように語られています。「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた」「そして毎日——毎日です——、心を一つにして

宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。」

この箇所ではクリスチャンは毎日、説教や教育や薫陶のために集まったのです。日曜日だけとか、日曜日に一度だけではなかったのです。少しでも早く家に帰ろうと心配したり、メッセージが短ければいいのと思ったり、長くなれば説教者を悩ますというようなことはなかったのです。「毎日」、しかも「毎日、堅く守った」のです。彼らはそうすることを何よりも望みまた楽しんだのです。もちろんこれは真のクリスチャンであれば必然的なことです。使徒ペテロもそのことを次のように記しています。「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粹な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長するためです」(Iペテロ二・二)。キリストにあつて生れたばかりの乳飲み子は純粹なみことばの乳を慕い求めます。もしそうでないならばその乳飲み子は病氣です。衰弱して悪い状態なので、医者に診せたほうが良いでしょう。必要な栄養を泣き求めるのは自然なことです。もし自分をクリスチャンだと考えている人たちで、みことばの説教を望まず、それをほんとうに楽しみ喜ぶこともなく、できるだけ多くのことをそこから得ることを期待しないなら、「この人たちはクリスチャンでしょうか」と問わなければなりません。それに彼らの態度は道理に反しています。彼らは新約聖書でクリスチャンについて述べられていることと一致しないからです。その人たちは大いにみことばを喜び、あがめ、

賛美したのです。集會に機械的に出席したのではなく、義務感からでもなかったのです。そうすることを当てにされているので、「私は礼拝に行つてきて自分の責任を果たした。さあこの後は家族に手紙を書いたり本を読んだり、いろいろ楽しみながら過そう」と言うのでもありません。まったく違います。それどころか彼らは何度集まっても満足することがなかったのです。

新約聖書の説教者である使徒たちは礼拝に誘うために家々を行き巡り、人々を説得したのであります。使徒たちが直面した困難はむしろ人々を家に帰すことでした。彼らは礼拝の雰囲気の中で彼らの全時間を過したかったです。多く得れば得るほど、さらに多くのことを得たいと彼らは願ったのです。毎日、しかも堅い決意をもって。人々を遠ざけることはできませんでした。これがどの宗教改革やリバイバルでも、常に教会を特徴づけた事柄です。ジャン・カルヴァンはジュネーブで毎日説教しました。毎日です。人々は渴きをもって彼の語るのを聞いたのです。ほかの人々の場合も同じです。マルティン・ルターの場合もそうでした。教会が真に教会としての機能を果たしているとき、このことは教会生活において真実となったのです。ですから私は、会衆に対する間違つた評価が間違つたタイプの説教を生み、そのため今日、人は礼拝に来ようとしないという点を論じているのです。説教が間違っているのか聴衆が間違っているのか、いずれかですが、両者が間違っていることのほうが多いでしょう。

私は少なくともこのような聴衆に次のように勧告します。もしも彼らが教会のすべての礼拝

に出席するこれといった理由がなくても、とにかく、大勢集まることに大きな価値があると気づいてほしいのです。一人の未信者の男性が、突然、重大な問題に陥ったと考えてください。ひどい問題を抱えています。でも彼を助けてくれそうにありません。当てもなく通りを歩いていて、たまたまある教会の礼拝の場に出くわします。ここで助けを見出せるのではと思いい、中にはいろいろと決心します。ところがいざはいつて見ると、そこにはほんの一握りの人々がいるだけです。しかも彼らもあまり幸せそうではなく、説教者が語り始めると何度も時計を気にしています。そこで彼はここには何もないと結論づけます。きつとこの一握りの人々はこうして出るように育てられたので出席しているだけで、それをやめようと考えたことさえないようだ。彼らにとってはたいして意味もなく、明らかに習慣やしきたりまたは義務感からそうしているのだ、と結論づけるでしょう。かわいそうにその男性はまったく失望し、彼には礼拝も何の助けにならないでしょう。しかし、もし彼が人々でいっぱい教会にはいり、その期待感にあふれた雰囲気気づき、何かを熱心に期待している人々を見るなら、「ここには何かがある。これだけ多くの人の群れをこの所に来させるものは何だろうか」と言うでしょう。そこで彼はすぐに関心を寄せるようになり、すべての事柄に深く注意を払い始めます。ですから大勢の人が礼拝しているという事実そのものが、しばしば神の御霊に用いられて人々に罪を認めさせ、回心に至らせるのです。私はこれまで何度もこの経験をしています。

そこで問題なのは、あまりにも多くの人がこれらの問題をじっくり考えようとしないことです。彼らはただ義務的に礼拝に行き、その義務を果してさわやかな気分になるだけです。しかし、礼拝に対するそのような態度は明らかに自らの姿を暴露するものです。訪れる人はこれを感じ取り、いつも出席する人々の態度がこのようなら、大した価値はないと結論を下します。これとは逆に、その所で神とお会いできると感じて出席する人たちの礼拝の場にはいるなら、人の理解を超えた不思議な方法で、その態度が自然に来訪者に伝わります。それで彼らは現実には何か起きていてと感じるようになり、ひいてはそれが神に用いられて人々を真理の知識に至らせるのは無理からぬことです。

このことは講壇に必要とされるのは権威、しかも大いなる権威であることを意味しています。会衆席はメッセージや順序を決定したり、講壇に命令する立場にはありません。私はこれを絶対的なことだと断言します。講壇は会衆を評価すべきですが、それは権威をもって行うべきです。今日の教会の最大の必要は講壇がこの権威を回復することです。

どうしたらこれが実現され、この権威が回復されるでしょうか。私たちはここでよく注意しなければなりません。というのは以前にもこの点が問題となり、しばしば間違った方法で取り扱われたからです。キープル、カーディナル・ニューマン、E・B・ピュージ、カーディナル・マニングなどという人物に関連する前世紀のトラクト運動の場合がそうでした。彼らはこの

権威の問題に関心を持っていました。彼らは講壇と教会がその権威を失っている事実気づき、それを再び獲得し取り戻す方法を探求し始めました。しかし、プロテスタントの立場からすれば、彼らはまったく間違った手段を講じたのです。要するにその権威を回復する方法は説教者や牧師を人々からずっと離れたところに立たせることだと言って、そのためさまざまな種類の祭司服を説教者に着せ、その働きに祭司的、神秘的要素をもたせようとしたのです。外見を物々しくすることによって権威を増し加えようとしたわけです。しかも説教者を祭司と呼び、彼には礼典を含め特別な権威が賦与されていると主張しました。動機はよかったですよ、誤った手段を採ったために、結局、説教は軽視されて礼典が誤って強調されました。しかし多くの場合、ただ礼拝の美的面が強調されただけでした。

前世紀の非英国教会の場合を見ると、彼らも誤った手段を用いたように思われます。すなわち彼らは講壇における権威の鍵は学問にあると確信したのです。確かに学問は大いに価値があり重要ですが、学問だけが説教者に権威を与えるものではありません。学者の間では学問は名声を与え、「賢者」であるがゆえに魅力的な人物とするでしょう。しかし、それは講壇に第一に求められることではありません。講壇の最大の必要は靈的な権威です。私は有能であれば、それだけその人はすぐれた説教者となるはずだと述べましたが、それはあくまで知識や教養が仕えるものとして用いられる場合に価値をもつのであって、それ自体が権威をもたらすのでは

ありません。説教者に権威を与える唯一のもの、それは彼が「聖靈に満たされる」ことです。幾世紀を通し、特に過去百年間の教会の歴史は、私の述べていることを証明し実証しています。

ところでこの権威の問題に関して一言付け加えたいと思います。ある人々にとっては驚きかも知れませんが、これまで私が語ったことからしても実際愚かしく聞かせるかも知れません。それは説教者が講壇でガウンを着用するのは良いことで、正しいと私が信じていることです。それなら、一体、これとこれまで私が述べてきた靈的権威に関する事柄とどう調和するのかということになりましたが、私にとってガウンは召命のしるしであって、この働きに「選び分かれたれている」ことのしるしです。それ以上のことではないのですが、その召命のしるしです。もちろん、講壇でガウンを着用する価値を確信するといっても、ガウンにフードを付けることまで確信してはいません。フードはその人の召命にではなく、人物とその能力とに注意を向けさせます。つまりフードは働きのしるしではなく、その人の学問的功績のしるしだからです。神学学士のガウン、神学博士のガウン、それに文学修士のガウンといった具合です。それはただ混乱をもたらすだけで、何よりも説教者の靈的な権威から注意をそらすものです。ですからガウンを着用しても決してフードを付けてはいけません。

以上私は講壇のもつ権威に反対する人や聖書を朗読してそれにわずかの注解や討論を加えるだけでよとする現代の知識人が教えられなければならない事柄——講壇に立つ者はほかの人

以上で説教とは何か、すなわち説教する「行為」についての一般的考察を終えることにします。これを完結するにあたり、私のこれまで述べた事柄からして、非常に霊的でない響きのする事柄を一言加えます。しかし、ほんとうに大切なことです。それは建物のことです。結局、会衆は建物の中で座って説教者の語るのを聞くのですから、建物は大切です。建物はまた人々が礼拝に来る目的を果す助けともなれば、妨げともなるからです。建物にはこのような重要性があります。度を越してはいけません。ローマ・カトリックとその後継者や模倣者たちはこのことで行き過ぎをしました。彼らがその全盛期にすばらしい動機に鼓舞されたことはだれもが認めるところです。彼らが建てた大聖堂などの広大で威圧するような華麗な建造物は「聖なる麗しさの中で」神を礼拝したいという願いと、神の栄光と偉大さを意識することを表現する試みであったのです。しかし、説教という見地からすれば、それを不可能にしてしまうほど行き過ぎをし、何よりも大切なことを無視する過ちを犯したのです。教会の建物はそれを建てた人々に関して多くのことを私たちに教えてくれます。

ところで前世紀の中頃、イギリスだけでなくアメリカでもたいへん面白い変化が起きました。それまで教会堂やチャペルは一般にたいへん質素な建物でした。人々が神を礼拝し、福音の説教を聞きに集まれるよう建てられたので、「集会の家」と呼ばれました。要はその目的に充分なものであれば良かったのです。しかし前世紀の中頃、一つの変化が現れ、人々は

より有能だからではなく、神がほかの人には与えておられないある特別な賜物を彼に与えておられるのでそこに立つのだということ——をさまざまの面から述べました。説教者が講壇に立つのはこの「召命」を受けているからで、その召命は教会によって確認されるものです。ですから講壇に立つ者と競うような気持ちになつたり、彼と同じ程度の知識があり、同じような本も読めるからといって、権威をもって自分たちに語る説教者の権利を問題にすべきではありません。事実はずっとその通りで、ときには説教者よりもっと有能で多くの知識のある人もいるかも知れません。しかし、そうであっても彼は選り分かれていたのです。なぜでしょうか。それは彼の生来の賜物だけでなく、特に神が彼に与えてくださった賜物のゆえです。それがだれにでも与えられていない権威を彼に与えているのです。もしクリスチャンが、たとえば人々に有能で学識や豊かな知識があるとしても、神が召して任命し、その責務をなす遂げるために遣わした者に、座って喜びと心からの期待をもって耳を傾けようとするなら、その人がほんとうにクリスチャンかどうか私は尋ねてみたいものです。それは霊的権威の問題であって、知性や教養から来る権威ではないからです。ですからすべての人がこのことを認め、いつでも説教者に耳を傾けるべきです。

*

*

ゴシック様式をまねた高大ではな飾りの建物を建造し始めました。巨大な富が袖廊の付いた高い丸天井の建物を建造するのに費やされ、その強調点は美と荘厳さに置かれたのです。しかし、気の毒にもこの人たちは自分たちの内面を暴露してしまいました。「非国教会や自由教会の私たちは、今や尊敬に値する者になろうとしている。私たちは以前よりも多く教育を受け、教養もあり、学識者や支配階級の人々と同じ地位を得ようとしている」と言い始めたのです。それで英国国教会やカトリック教会の建造物を模倣し、ほとんどの建物に音響調整を不可能とする巨大なドームや柱、それにほかの装飾品を取り入れたのです。その考えとするとそこはいかに自分たちが無学な者から進歩し、福音主義の野暮ったさから向上したかを示すことにあるのです。しかし、それは実際悲劇的なほど靈性の低下を露呈しました。建物が華美になるにつれて、決して靈性は低下します。建物はその中に集う人々とその喜びについて多くを教えてくださいませんが、それ以上にそれを建てた人々についても教えてください。

それでは建物に何を期待すべきでしょうか。第一に絶対必要なことは良い音響状態です。これはいくら強調してもし過ぎることはありません。私はさまざまの国の教会で積年説教してきた経験から話しています。信じられないでしょうが、私は先の大戦以来、イギリスで建てられた新しい建物——その多くは爆撃のために再建されたのですが——のうちで、音響設備を必要としない建物を一つも思いつきません。なぜでしょうか。建物が大きいせいではありません

——まったく小さい建物もあります。そうではなく、音響状態が絶望的なのです。なぜそうなのでしょうか。一般的に、建築家が音響学に無知だからです。美観や外観、また直線や曲線などに関心があっても、音響学については何も知らず、説教の何たるかも知りません。教会の建物で第一に必要なものは、適切な音響設備です。どうしたらそれを確保できるでしょうか。これに関する重要かつ不可欠な原則は平板な天井です。どんなにわずかでもそうでないものにはいつも問題が起きますので、曲線や角度のあるものは絶対避けるべきです。無理にでも天井は平らにすべきです。私たちの先達はこの点を知っていたので、平らな天井の四角い建物を建てました。その結果、建物がどんなに大きくても音響状態はほとんど完璧でしたし、現在もそうです。問題は建物の大きさではありません。音響はおもに天井によって決ります。壁のくぼみは破壊的で、あまり高い天井も間違いです。それこそカトリック教会や国教会をまねて説教に弊害をもたらしたものです。事実多くの講壇の上部に共鳴板があること自体、私の言うことを雄弁に物語っています。雄弁にというより「反響している」と言うべきでしょうか。説教者は自由でなければなりません。声の具合にまで気を配る必要があるなら、説教の効果はそがれるでしょう。説教者は自由であるべきで、この点からも建物の持つ特徴は大きな役割を果します。さて講壇についてですが、それを中央に置いてください。片隅に押しやってはなりません。説教は教会とその機能に関する最大の働きで、ほかの何より必要とされることです。ですから

講壇は中央に置いてください。では講壇の高さはどうでしょう。聴衆との関係で適切な高さであることは重要です。今日の傾向として講壇は低くなっていますが、それは設計者が説教の何たるかを知らないからです。誤解しないでほしいのですが、構造や機能上からも、説教者は常に会衆に向かって上の位置から説教すべきだからです。それで講壇は必ず適切な高さに置いてください。もし教会に特別席があるなら、説教者が講壇に立ったとき彼の目がその席の前列に座る人々とほぼ同じ高さであることです。もし会衆のほうが高ければ、彼らを見るとき説教者は顔を上に向けなくてはならず、のどが閉まるので良くありません。説教台の高さも重要です。最近、私はある教会で説教したいへん困難を覚えたことがあります。それは説教台が私の胸の上部くらいまであったからです。自分がまるで絶えずもがきながら平泳ぎでもしているように感じました。説教という見地からして、そのような状態はまったくおかしいものです。やはりそれは新しく造られた建物でした。箱の中に閉じ込められて説教はできません。説教者は被告席にいる囚人ではありません。彼は自由な立場にいななくてはならず、説教者はこのことを主張しなければなりません。

この点を例証する一つの話をしてこの講義を終えます。もう四十年ほど前のことですが、私は北ウェールズのとて大きな会堂で説教するために出かけました。その教会の牧師は、いわゆる「大衆説教者」としてよく知られた方でした。しかし、私は彼が礼拝前に彼の部屋で行ったことを忘れることができません。彼はたいへん紳士的で、実際貴族的な振舞いで私を迎えてくれました。彼はその点でも有名でした。ところが彼は私を上から下までじろじろ見て調べ始めたのです。私は自分が彼の気に入る服装でないのか、それとも自分で気づかずに重大な過ちでもしているのかとつぶかしく思いました。次に彼は私のすぐそばに来て、私の腹部の上のほうに触れたので、一体何が起るのだろうと考え始めました。すると彼は私とそこに一緒にいた何人かの執事に向かって、「踏み台は二段あれば充分だと思おう」と言いました。後で分ったのですが、この奇妙な処置を説明すると次のようなことでした。彼のチャペルは千四百人まで収容できる大きな建物でした。彼は会堂が満席になりそうなので、私のような小柄な説教者が会衆を見渡せるようにいろいろと心遣いをしてくれたのです。「説教台がざっと説教者のみぞおちより高ければ説教はできません」と彼は言いました。彼は訪れる説教者のために三段の踏み台を講壇の足元に取りつけてもらったのです。背の高い人になら踏み台を置く必要はないでしょうが、一段必要な人もいれば、二段必要な人もいます。ある人には三段必要かも知れません。このように彼ほどの説教者も会衆とは相対的に同じ位置に立てるよう配慮したのです。馬鹿げたことと思われるかも知れませんが、多くの講壇で苦しんだ経験のある者として、これがほんとうに重要であることは請け合います。それこそオリバー・クロムウェルの信条である、「神に信頼せよ。また汝の火薬を乾かしておけ」ということではないでしょうか。

講壇は中央に置いてください。では講壇の高さはどうでしょう。聴衆との関係で適切な高さであることは重要です。今日の傾向として講壇は低くなっていますが、それは設計者が説教の何たるかを知らないからです。誤解しないでほしいのですが、構造や機能上からも、説教者は常に会衆に向かって上の位置から説教すべきだからです。それで講壇は必ず適切な高さに置いてください。もし教会に特別席があるなら、説教者が講壇に立ったとき彼の目がその席の前列に座る人々とほぼ同じ高さであることです。もし会衆のほうが高ければ、彼らを見るとき説教者は顔を上に向けなくてはならず、のどが閉まるので良くありません。説教台の高さも重要です。最近、私はある教会で説教したいへん困難を覚えたことがあります。それは説教台が私の胸の上部くらいまであったからです。自分がまるで絶えずもがきながら平泳ぎでもしているように感じました。説教という見地からして、そのような状態はまったくおかしいものです。やはりそれは新しく造られた建物でした。箱の中に閉じ込められて説教はできません。説教者は被告席にいる囚人ではありません。彼は自由な立場にいななくてはならず、説教者はこのことを主張しなければなりません。

この点を例証する一つの話をしてこの講義を終えます。もう四十年ほど前のことですが、私は北ウェールズのとて大きな会堂で説教するために出かけました。その教会の牧師は、いわゆる「大衆説教者」としてよく知られた方でした。しかし、私は彼が礼拝前に彼の部屋で行ったことを忘れることができません。彼はたいへん紳士的で、実際貴族的な振舞いで私を迎えてくれました。彼はその点でも有名でした。ところが彼は私を上から下までじろじろ見て調べ始めたのです。私は自分が彼の気に入る服装でないのか、それとも自分で気づかずに重大な過ちでもしているのかとつぶかしく思いました。次に彼は私のすぐそばに来て、私の腹部の上のほうに触れたので、一体何が起るのだろうと考え始めました。すると彼は私とそこに一緒にいた何人かの執事に向かって、「踏み台は二段あれば充分だと思おう」と言いました。後で分ったのですが、この奇妙な処置を説明すると次のようなことでした。彼のチャペルは千四百人まで収容できる大きな建物でした。彼は会堂が満席になりそうなので、私のような小柄な説教者が会衆を見渡せるようにいろいろと心遣いをしてくれたのです。「説教台がざっと説教者のみぞおちより高ければ説教はできません」と彼は言いました。彼は訪れる説教者のために三段の踏み台を講壇の足元に取りつけてもらったのです。背の高い人になら踏み台を置く必要はないでしょうが、一段必要な人もいれば、二段必要な人もいます。ある人には三段必要かも知れません。このように彼ほどの説教者も会衆とは相対的に同じ位置に立てるよう配慮したのです。馬鹿げたことと思われるかも知れませんが、多くの講壇で苦しんだ経験のある者として、これがほんとうに重要であることは請け合います。それこそオリバー・クロムウェルの信条である、「神に信頼せよ。また汝の火薬を乾かしておけ」ということではないでしょうか。